

関山

かんざん

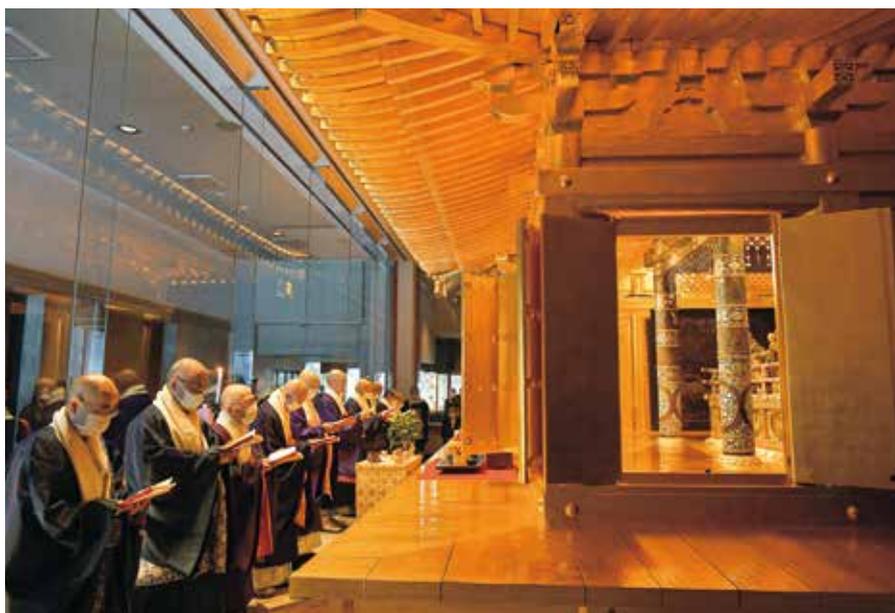
第26号



寺報 中尊寺

目次

寺報 グラビア					
「慈」いつくしみの心をもって	貫首 奥山 元照	書	5		
慈しみの心で			6		
国宝中尊寺金色堂保存修理竣工（概要報告）	菅原 光聰		9		
中尊寺の七堂伽藍ができあがるまでに	入間田宣夫		12		
『静 寂』	菅原 正二		26		
了翁禪師と中尊寺経（講演抄録）	佐々木邦世		28		
香花灯明	菅原 光聰		33		
新発見・毛越寺経塚と鶏足洞	八重樫忠郎		40		
中尊寺と毛越寺の遺跡探訪	佐々木五大		48		
『新しいお寺様式』	破石 晋照		52		
〈報告〉山田俊和前貫首 県勢功労者に			54		
風信／語録（郵便受けから）			55		
「清衡公の願いそして先人たちの言葉」			56		
千葉方彩・土方香茗二人展（開催報告）			59		
〔表紙解説〕仏教と孔雀					
関山植物誌（11）		破石 晋照	60		
新刊紹介			61		
関山句囊・歌籠			64		
一枚の写真から（3）			74		
御神事能番組		北嶺 澄照	75		
光勝院本尊造立結縁浄財寄進 御芳名			76		
陸奥教区宗務所報			90		
御奉納者 御芳名			91		
浄財御奉納者 御芳名			91		
赤堂稻荷鳥居建立 御芳名			92		
不動尊篤信御奉納者 御芳名			92		
執務日誌抄			94		
〈表紙〉金色堂中央壇格狭間孔雀					



国宝中尊寺金色堂保存修理竣工法要
(令和2年12月15日)

磐井清水若水送り

コロナ収束、平安願う



元日の早朝、磐井清水から若水をくむ若水送り保存会の佐藤会長（右）と実行委員会の安東委員長

行列中止も

中尊寺へ献上

一関市東山町松川の磐井清水で年の初めにくむ水を平泉町の中尊寺まで運ぶ故事を再現する「磐井清水若水送り」は新型コロナウイルスの影響で1993年の復活以来初の中止となった。例年のような行列はなかったものの、磐井清水若水送り保存会と同実行委員会の代表は一日朝、磐井清水から若水をくみ中尊寺に献上、コロナが早く収束し、世界が平安を取り戻すことができるよう願った。

磐井清水若水送りは松川地区に伝わる元日恒例の行事。例年は午前1時半に地元の子供が磐井清水からひしゃくで水をくみ、150人前後の行列が若水を入れたおけなどを手に出発。中尊寺まで約20キロの道のりの途中にある九つの番所で協力者から甘酒や玉こんにやくの振る舞いを受けながら、雪が舞い風が吹き付ける未明の峠道などを歩く。

今年も保存会の佐藤育郎会長（73）と実行委の安東正利委員長（71）が早朝磐井清水でくんだ若水を車で中尊寺に運んだ。東の空が白む頃に奈良坂峠と東岳峠を越え寺に到着。「六根清浄」「御山繁盛」の言葉を唱えながら坂道を上り、佐藤会長が「ただ一つ、コロナ収束を本年の祈願いたします」と述べ、金色堂前で佐々木邦世中尊寺仏教文化研究所長らに椀と若水を入れた竹筒を献上した。

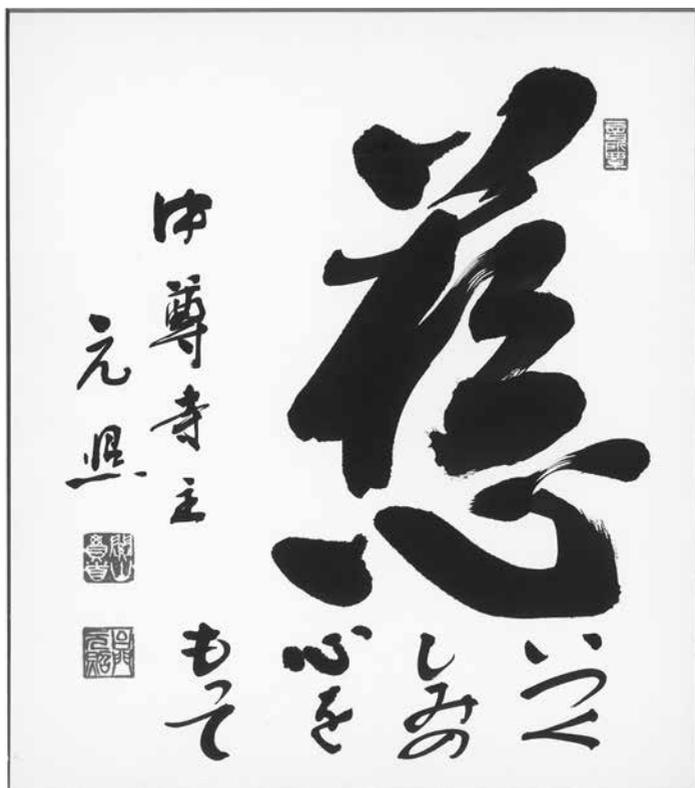
磐井清水は同町松川字卯入道平地内の県道東山薄衣線沿いにある小さな泉。かつて地元の人たちは元日早朝に磐井清水の若水をくんで神棚に供えた

り、旧暦10月20日の恵比須講に磐井清水からフナを捕り神棚に供えたりしていたという。

奥州藤原氏の時代には松川の里人が藤原秀衡公の命で元日に磐井清水から平泉府まで手から手へと若水を渡して運んだとされる。そんな故事ならい復活した若水送りは高橋克彦さん原作のNHK大河ドラマ「炎立つ」の放映を記念して有志の主催で始まり、今年第29回を数えるはずだった。

佐藤会長は「第29回若水送りは行列などを中止したものの、基本的な事項は継続するとして中尊寺との申し合わせにより若水を進上した。コロナが収束して世界が平安となるのが人々の願いと思うほどに、浄土の国づくりを進めた4代公に若水を上げることが省略したくないという意をくんでいただいた」と話す。

若水は1年の邪気を払うものとされ、安東委員長は「早く新型コロナウイルスが収束して普通の暮らしが戻ってほしい」と願いを込めた。



貫首揮毫



奥山元照貫首 陸前高田市小友地藏尊にて慰霊法要（令和2年11月25日）



国宝中尊寺金色堂保存修理

「昭和の大修理」から50年余、文化庁、関係機関と協議の上、経年による漆箔の亀裂、剥落に対する保存修理を実施。写真、上は壁面の修理前、下は修理後。板壁の亀裂が修復されたことがわかる。（記事9ページ）

慈しみの心で

中尊寺 貫首 奥山元照

昨秋、奈良唐招提寺第八十八世御長老西山明彦律宗管長様が、錦秋の当山をご訪問されました。

唐招提寺では、東日本大震災復興祈念として、東北の更なる復興を祈念・支援されたいとの趣旨に基づき、東山魁夷展唐招提寺御影堂障壁画展を宮城県立美術館開催の後、十一月十四日から盛岡市の岩手県立美術館で巡回開催しました。その唐招提寺御影堂の六十八枚の襖絵は、東山画伯が鑑真大和上（じょう）に捧げるため、何度も中国・日本各地を訪れ、十一年もの年月をかけて完成させた大作になります。西山管長様には、そのオーブニングの前日十三日、中尊寺にお参りいただきました。

唐招提寺といえば、井上靖の小説「天平の甕」の主人公鑑真大和上を思い出される方が多いと思います。朝廷からの「伝戒の師」としての招請を受け、当時の中国、唐の国から仏教の戒律を日本に伝えました。十二年間で五回の渡航を試みて失敗、次第に視力を失うこととなりましたが、天平勝宝五年（七五三）、六度目にして遂に日本の地を踏まれました。その後、七十六歳で御遷化されるまでの十年間、東大寺と唐招提寺で過ごされ、天皇、僧侶を始めとする多くの人々に授戒をされ日本国中に仏教を広めました。

西山管長様は御挨拶の後、中尊寺本堂で読経されご参拝されましたが、その際に当山ご本尊の宝号「南無釈迦牟尼佛」をお唱えになりました。ご発声が、本堂にゆっくりと丁寧に一字ずつ心を込められて三遍お唱えになりました。隣席で唱和させて頂きましたが、お唱え頂いたその間は、ゆったりとした、穏やかな悠久の時の流れを感じられる世界が広がったひとときでした。その後、西山管長様は本堂を後にしながら、「奈良では、お念仏といえますとお釈迦様でございまして、一回のご宝号をお唱えするのに千返お唱えする気持ちを含めますから、どうしてもゆっくりとお唱えすることになります。」とおっしゃいました。私には、きつと鑑真大和上が我々日本人を慈しみ、命をかけて日本に戒律を伝えて下さったことへの奈良の人々の感謝の心が、このお念仏には込められているのだと思えました。

当山は、嘉祥三年（八五〇）、慈覚大師円仁（じかくだいし えんにん）によって開山されました。慈覚大師は下野国（栃木県）のお生まれで、九歳で地元の大慈寺（だいにじ）に入って修行をされました。その大慈寺の師・広智（こうち）禪師は唐招提寺を開かれた鑑真大和上の直弟子道忠（どうちゆう）禪師のお弟子でした。東北地方では「お大師さま」といえば慈覚大師のことが多く、関東以北には、大師が開山されたり再興されたと伝わる寺は関東に二〇九カ寺、東北に三三一寺余あるとされ、このみちのくには慈覚大師の慈しみのみこころを感じる事ができます。

初代藤原清衡公が、「鎮護国家大伽藍」の建立を宣言され、法華経の普皆平等の教えにより、都のみちのくも全ての人々が平等であり、争いによる敵味方の差別の無い淨仏国土建設の大願を発し、中

尊寺を建立。二代基衡公が浄土庭園となる毛越寺（円隆寺）を建立しました。そして三代秀衡公は、無量光院を開き、四代泰衡公と歴代の奥州藤原氏頭首が万民の平和の願いを込めて、慈しみの心でのみちのくを治めたのでした。

金色堂は、昭和四十三年（一九六八）の保存解体大修理から五十年余が経過し、年月による変化や、幾度も見舞われた地震の影響などにより、壁面の亀裂や剥離が目立つようになったため、昨年保存修理工事が行われ、関係各位のご尽力により補修事業が無事に完了致しました。金色堂の極楽浄土の輝きはより一層の荘厳さを放ち続けています。

そして、その輝きを伝える中尊寺は、みちのくの人々の心のより所として、また参拝する多くの人々の心を照らし、久遠実成の釈迦牟尼如来、鑑真大和上、慈覚大師、奥州藤原氏と伝えられた慈しみの心をしつかりと伝えてゆきたいと思えます。

国宝中尊寺金色堂

保存修理竣工《概要報告》

菅原光聴

平成三十年（二〇一八）に金色堂のいわゆる「昭和大修理」が竣工して五十年が経過したことから、中尊寺では文化庁はじめ関係機関と協議の上、専門家諸氏に依頼し「国宝中尊寺金色堂保存環境調査委員会」を組織し、金色堂の現状と今後あるべき保存管理方法について審議していただきました。

その結果、構造上建物に多少の傾きが見られるものの緊急を要する状況にはなく、覆堂内の温湿度環境もおおむね安定していることから、今回の処置として経年による漆箔の亀裂、剥落に対する最小限の修理を行い、併せて将来想定される本格修理に備えて、過去の修理塗膜や金箔純度などの履歴調査を行い、その成果を蓄積してゆくことが必要との報告を受けたのです。

令和元年（二〇一九）七月、前述の委員会を「国宝中尊

寺金色堂修理委員会」として移行し、翌年四月には国庫補助事業が立ち上げられました。設計監理に（公財）文化財建造物保存技術協会、施工に株式会社小西美術工藝社を選定し、まずは修理方針と実施施工の仕様について検討がなされ、左記の方針が確認されました。

亀裂補修の基本方針

- 一、亀裂度合に応じた必要最小限の修理方法を採用する。
- 二、原則として昭和修理の漆箔も含め古い塗膜には手を加えない。
- 三、日本産漆等を使用する伝統技法による補修を行う。
- 四、将来の亀裂発生を考慮し、漆塗膜を固くしない。
- 五、破損した漆塗膜の除去にあたって、叩き落としや振動のある工具の使用を行わず周囲の旧塗膜保護に努める。
- 六、内法長押より地長押までを施工範囲とする。

また、実施工に入る前に複数の試験施工を行い、覆堂内

で手板等を実見して施工方法を確定してゆくことが確認されました。

当初、令和二年（二〇二〇）五月の工事開始を予定しておりましたが、折しも新型コロナウイルス感染症拡大の影響により約一ヶ月遅れの六月十一日、委員会において修理の基本方針と工法を委員、行政、設計・施工業者間で再確認し、同十五日に実地工事に着手しました。

修理工事は、関係者の間で方針、工法についての事前の議論が忌憚なく行われ共有がなされたこと、また日中の拝観時間内での公開工事としたこともあって順調に進みました。しかし破損箇所への補修にあたっては、通常の漆工芸の修理と異なり、建造物の垂直な板壁を周辺部分に一切影響を与えぬよう、漆研ぎは水を使わない空研ぎとし、振動を与える工具の使用も行わずに行うという難作業で、施工者の方々の労苦には感謝申し上げます。また今回の修理では壁などの修理箇所を面として捉え、破損箇所周囲の塗装面にも最小限の手を加えて箔足（金箔の継ぎ目）の違いや修理痕を目立たなくする、いわゆる建造物的修理の手法を採るか、亀裂などの破損箇所を局所的にタッチアップ

年（二〇二四）の金色堂建立九百年に向けて、文化財の護持はもとより奥州藤原文化とそこに込められた平和理念の顕彰に益々精進してまいりたいと思います。

（執事長）

国宝中尊寺金色堂修理委員会（敬称略）

委員長 濱島正士

委員 室瀬和美、三浦定俊、窪寺 茂、菅原光聰

国庫補助事業 国宝中尊寺金色堂建造物保存修理

事業期間 令和二年四月一日～令和三年三月三十一日

設計 公益財団法人 文化財建造物保存技術協会

施工 株式会社小西美術工芸社

施主 中尊寺

プ修理し、あえて修理痕を残す美術工芸的な修理を行うかという点についても議論がなされました。協議の結果、亀裂度合に応じた必要最小限の修理という方針に基づき、外壁などの亀裂部分は開口部のみの補修に留めて周囲の既存塗膜面には手を加えない一方、柱と壁の入隅部分など漆箔がギザギザに粉砕しているような箇所については、浮いた塗膜も戻せるものは戻しながら周囲の塗膜を必要最小範囲で削って下地処理を行い帯状に修理を加えることとしました。また堂内壁や西側外壁など当初とみられる古塗膜に対しては剥落が懸念される箇所に生漆を浸透させるに留めることとしました。一つの修理箇所であっても複合的な破損の様相を呈している場合もあり、一箇所ごとに慎重に検討しながら作業が続けられました。

令和二年十一月五日、文化庁による現地確認が行われ、同年十二月十五日には中尊寺一山による竣工法要が営まれて、修理事業も無事竣工を迎えました。

コロナ禍の厳しい情勢の中でご尽力いただきました多くの皆様にご心より感謝申し上げますとともに、令和三年（二〇二一）の「平泉」世界文化遺産登録十周年、そして同六



金色堂修理現地説明会

12月5日、文化庁による保存修理現地確認終了後、一山僧侶への説明会が行われた。

中尊寺の七堂伽藍が

できあがるまでに

入間田 宣夫

はじめに

中尊寺の七堂伽藍は、平泉藤原氏初代の清衡によつて創建されたと伝えられる。たしかに、「寺塔已下注文」(文治五年)に記された主要な堂宇は、それに該当するかもしれない。

たとえば、最初院(「注文」には「多宝寺」、長治二年/一一〇五)、大長寿院(同じく「二階大堂」、嘉承二年/一一〇七)、(大)釈迦堂(供養願文伽藍、天治三年/一一二六)、金色堂(天治元年/一一二四)などが、それである。ならびに「注文」に特記される「一基塔」(七堂伽藍に先駆けて建立された法華経塔)などは、たしかに、それに該当するかもしれない。

それらの七堂伽藍のうち、(大) 釈迦堂は百余体の釈迦像を安置する。中尊寺の金堂にして、本来的な意味における中尊寺とは、その金堂をさす寺号だったのかもしれない。

けれども、中尊寺境内に散在するたくさんの堂宇のうち、「地主権現」「鎮守」として仰がれる山王社・白山社が、清衡以前における創建なることは、明々白々である。

同じく、瑠璃光院(いまは薬師堂)・金剛王院(大日堂)・願成就院(薬師堂)なども、その別当家たるべき永根坊・池辺坊・中之坊などに残された伝説によつて、清衡以前における創建と知られる。そして、千手院(千手堂、本尊の千手観音は洛陽清水寺の霊像を模す)にも、観智坊によつて、治安三年(一一〇三)の創建伝説が残されていた(『中尊寺史稿』)。

してみれば、中尊寺が清衡の創建になるとはいつても、清衡以前にまで遡る可能性がある堂宇の方が、数多く存在していたことになるのではあるまいか。

しかも、その可能性があるなかには、金剛王院(大日堂、金剛界大日如来坐像・重文を祀る)のように、明らかに密教に属する堂宇が存在していた。さらには、金峯山信仰にかかる蔵王権現堂(長久四年/一〇四三)のようなユニークな存在も知られる。

さらにいえば、清衡による七堂伽藍の創建は、たとえば「一基塔」(法華経塔)、「多宝寺(塔)」の建立から始められたことに示されるように、さらには山王社・白山社を鎮守として取り込んでいくことに象徴されるように、明らかに比叡山延暦寺に体现される法華経の教えに準拠するものだった。けれども、その法華経の教学にすべてを従わせることはあたわず、密教そのほかの異質な要素を初めから包摂せざるをえない。ということになっていった。それならば、建武元年(一二三三)衆徒等申状に、「衆徒等所学者、顕密宗旨」「所行者、一朝静謐之懇祈也」と記されていることは、不思議でも何でもない。

そういえば、佐々木邦世『中尊寺史稿』にも、「中

尊寺の、顕教・密教あわせた天台宗の大刹としての歴史」、「入唐求法して天台密教を大成された慈覚大師を(開山)として頂くことによつて、密教の世界に重要な心象(イメージ)の上で当山は最もふさわしく荘嚴され、所伝の密法が正当化された」と記されていた。

今回は、その辺りの事情について、あらためて考えてみることにしたい。

中尊寺の「地主権現」「鎮守」として

中尊寺境内のうち、「白山・々王」社は、「地主権現」として、「七百歳歳霊神」なりと記されていた。そして、具体的には、「後冷泉院御宇、天喜・康平之比(一一〇五三〜六五)」に、「奥州刺史源頼義・義家朝臣」が、「安倍頼時・同貞任・宗任」を「追討」せらるゝのとき、「衣関山月見坂」にて、当社を拝し奉り、「厩尻・小前沢両村」を「寄附」せらる。と記されていた(建武元年衆徒等申状案)。

さらには、鎌倉後期、中尊寺惣別当「備前助僧

都春助(在鎌倉)は、「修理造営」の怠慢、「仏神事等」の欠如の咎によって、「鎮守白山権現は夢想を鎮示し、山王七社はその失(神意不快の徴証)を常に顕わす」ということになった。具体的には、その神罰によって、「病床に沈む」ということになった。そのために、惣別当は、「修理造営」といい、「仏神事等」といい、「先例に任せて、精誠をいたすべし」と誓う「願書(起請文)」を納めたものの、時すでに遅し。「死去」を免れることはできなかつた。これまた、建武年間における中尊寺衆徒等の申状に記されているエピソードである。

また、白山社の「旧別当」家たるべき法泉院小前沢坊には、長元二年(一〇一九)、慈覚大師の法孫、円祥阿闍梨の創建とする伝説が残されている。

残念ながら、山王社には、同じく別当の常住院南谷坊によって、創建の年次を伝える伝説が残されていない。けれども、鎮守として、古くから知られた存在である。白山社とは、鎮守として並び

立つ存在であった。もしかすると、山王社の創建も、ほぼ同時期に。ということだったのかもしれない。

したがって、頼義・義家父子の寄進(天喜・康平之比)、ないしは白山社の長元二年創建を、そのまま信ずることは留保しなければならぬにしても、清衡による中尊寺七堂伽藍の造営に先立って、「白山・々王」の両社が存在していたことには、疑いを容れない。

神体山としての「山王が岳」

その山王社(いまは山王堂)の在所については、境内のうち、南谷から見上げる峰々のうち、「山王が岳」の麓に位置している。

逆向きにいえば、その山王権現の御神体(「神体山」)たるべき「山王が岳」の頂上は、麓の山王社の祭神を仰ぎ見る視線を延長してきた、その先に当たっている。

すなわち、延暦寺の鎮守たるべき坂本の山王権現の神体山(牛尾山・八王子山)に倣って、然る

べき甘南備型(こんもりとした丸い小山のかたち)の里山が「山王が岳」として取り立てられた。あわせて、その麓の山王社(日吉社)が創建された経過が明らかである。

その山王社の傍らには、平泉型の巨大な宝塔が立つ。その一二世紀作成の塔身部(七二・六センチメートル)には、円相中に四方四仏の種字が刻まれている。一山の徒弟は、剃髪得度の髪を、その内部に納めるのが「習わし」とされる。さらには、恒例の山王講(五月六日)には、「三問一答」の論議が宝前に延べられている(『中尊寺史稿』)。さすがは、一山の精神的支柱たるべき山王社ならではの伝統である。

ただし、同じく「地主権現」「鎮守」として肩を並べる白山社のばあいには、「山王が岳」のよいうな甘南備型の神体山の存在は見分けがたい。金色堂や大長寿院のある山上平場の東北端に位置する白山社のことである。その後背に神体山ありなどとは、とても言うことができそうもない。けれども、その「旧別当」家たるべき法泉院小前沢坊

の立地する東隣の峰からすれば、谷を隔てた、西隣の峰上に白山社あり。すなわち、法泉院の主尊を仰ぐ、その延長線上に、峰上の白山社が立つ。と見えなくもない。

もうひとつの神体山としての金峯山

そういえば、「金峯山」のこともあった。境内南谷から見上げる峰々のうちでは、「山王が岳」の西方に位置している。

その「金峯山」を祀るべき麓の「蔵王権現社跡」に位置する円乗院桜本坊には、一一世紀の中葉は長久四年(一〇四三)、慈覚大師の法孫たるべき清雅阿闍梨による開山伝説が残されている。

円乗院の当主たるべき佐々木邦世氏の執筆による『中尊寺史稿』には、「桜本坊という名は、金峯山に所縁の坊名であるから、坊跡を再興した当初より、金峯山別当たることは、伝え聞いて知っていたことであろう」とも記されていた。

すなわち、桜本坊は、いまは阿弥陀堂の別当ということになっているが、本来的には「金峯山」蔵

王権現社」の別当職を受け継ぐべき立ち位置にあったことが、この証言からしても、明らかである。

金峯山信仰の全国的な盛り上がりは、一一〜一二世紀のことだったと見られる。そこからしても、長久四年（一〇四三）の開山をむげに疑うことはできない。

神体山たるべき「金峯山」の頂上は、麓の円乗院の本尊を仰ぎ見る目線を延長した、その先に当たっている。本来的には、「蔵王権現社」に祀られる権現像を仰ぎ見る目線を延長した、その先に、「金峯山」は位置していたのに違いない。

とするならば、ここにおいても、甘南備型の神体山たるべき「金峯山」があつての「蔵王権現社」ということがいえるであろうか。

それについても、中尊寺成立史における神体山のはたらきについては、その絶大なるを、あらためて痛感しないではいられない。すなわち、景山春樹『神体山』（学生社、一九七一年）に学びながら、奥羽における中世寺院の成立史について、

これからも、がんばって取り組んでゆかなければならない。

どうやら、「山王が岳」「金峯山」を仰ぎ見る南谷の辺りは、中尊寺境内のなかでも、早い時期の開発に属するものだったらしい。

考古学的にみても、そのことが言えるかもしれない。たとえば、南谷円教院境内では、「陶器片」「かわらけ」が検出されている。発掘・調査担当の八重樫忠郎氏の教えによれば、「一二世紀初頭」（清衡期）のものだとされる。

南谷から立ちあがる源流の風

藤原清衡による七堂伽藍の造営は、「当国中心」たるべき「山頂上」に位置する「一基塔」の建立から始められた（『寺塔已下注文』）。それは、法華経全八卷（開結ともに全十卷）を書写・奉納して、そのみちのく世界における「仏国土」建設をアピールするものであつた。

その「一基塔」が建立されたのは、「釈尊院西側の山頂」である「可能性が高い」（八重樫「中

尊寺の考古学」、同『平泉の考古学』Ⅲ三章、高志書院、二〇一九）。いまは、「中尊寺防火水源貯水池」が設置されている山頂の一郭である。

確かに、そこかもしれない。南谷から「山王が岳」を仰ぎ見る、その先に聳える峰上に位置している。それなりのスペースにも、恵まれている。そこならば、安倍・清原氏の抛った衣川の辺りの平場を、一望のもとに収めることができる。逆向きに言えば、衣川の辺りから、しっかりと仰ぎ見ることができ。すなわち、八重樫氏によって重要視されている景観的な意味あいになつていく。

その「一基塔」の建立のうえで、清衡による七堂伽藍の造営は、「多宝寺（塔）」（「最初院」とも）、「二階大堂」（「大長寿院」とも）、さらには谷あいの「鎮護国家大伽藍」（供養願文伽藍、大釈迦堂、金堂）というように、つぎつぎに進められていったのに違いない。

いずれにしても、清衡による伽藍造営の立ち上げは、南谷における「山王が岳」の存在があれば

こそ、はじめて可能になった。すなわち、「山王が岳」あつての「一基塔」。さらには「一基塔」あつての中尊寺七堂伽藍の造営。ということが可能なのではあるまいか。

ただし、南谷が「源流の地」だからといって、清衡以前の創建を称するすべての堂宇が南谷に存在していたとするわけにはいかない。

たとえば、「鎮守」「地主権現」として、山王社にならび称せられる白山社のばあいには、清衡以前の創建は確実なれども、南谷にはあらず、山上平場の一角を占めていた。

同じく、瑠璃光院永根坊の応和三年（九六二）の創建伝説によって、薬師堂（薬師瑠璃光如来を祀る）が、清衡以前から、山上平場に存在していたことが推測される。

あわせて、「伝三重池跡・真珠院境内地区」といった丘陵尾根部分からは、「一一世紀末に遡る可能性のある最も古い段階のかわらけ」が出土している、「そこが最初に人の手が入った部分である

ことを示している」と記されてもいる。

同じく、「伝金堂跡」(実は清衡創建の多宝寺跡)からは、「一一世紀に遡るとも考えられるロクロかわらけ」、「一一世紀後半の東海産灰釉陶器や一一世紀代の舶載白磁四耳壺・碗Ⅳ類等が出土している」(『中尊寺収蔵の出土遺物整理報告書』)。

とするならば、清衡以前にも、「瑠璃光院境内」
「伝三重池跡・真珠院境内」、さらには「伝金堂跡」
(多宝寺跡)などによってかたちづくられる山上平場の辺りには、それなりの賑わいがあったことが明らかである。すなわち、中尊寺七堂伽藍が造営された後に、「寺院の中央」とよばれることになるだけの素地は、すでに備えられていたのかもしれない。

そういえば、伝教大師(最澄)による延暦寺の造営にさいしても、その立ち上げの拠点になったのは、琵琶湖側の坂本に聳える牛尾山(八王子山)であった。その甘南備型の霊峰には、あの大和三輪山の祭神が迎え祀られて、その本地仏は釈迦如

来なり。とされていた。地元の豪族たるべき最澄の父親(三津首百枝)によって、神宮寺も建立されていたことも知られる。そこに登場したのが、中国帰りの最澄である。浙江省は天台・山国清寺の伽藍神「山王権現」を、その霊峰の祭神としてあわせ勧請するのにもなつて、麓に山王社(日吉社)を建立する。そのうえで、山王社を鎮守として、その神体山たるべき「牛尾山」の延長線上に聳え立つ比叡山の峰々に、一乗止観院(のちの根本中堂)を手始めとして、つぎつぎに延暦寺の七堂伽藍を建立して行くのである。いずれともに、よく知られていることからある(景山春樹『神体山』前掲。同『比叡山』NHKブックス、一九七〇年ほか)。

その比叡山上からは、京都市街を一望のもとに収めることができる。逆にいえば、京都側からは、はるか北東方向に、国家鎮護の寺として、延暦寺を仰ぎ見ることができる。それに対して、坂本の牛尾山の側からすれば、琵琶湖方面を一望のもとに収めることができる。まことに、対照的な眺望

のありかたであった。

そのような景観的な意味あいにはいたるまでも、清衡による中尊寺伽藍造営の立ち上げは、伝教大師による延暦寺のそれに倣っている。ということと言えるのかもしれない。

清衡の七堂伽藍と顕密の別当坊

総じていえば、清衡による七堂伽藍の造営事業は、空白のキャンパス上に描き出されたものにはあらず。顕密の別当坊の大勢による地を這うような活動を前提として、それらを結集することなしには、成就することができなかったのである。

だが、そればかりではない。その事業が完成した以後においても、それらの別当坊の大勢の活動がなければ、七堂伽藍の持続的な管理・運営を果たすことができなかった。

たとえば、鎌倉期には、主要な伽藍の管理運営が、幕府任命の惣別当(在鎌倉)に委ねられていたが、その「修理不法」によって、「諸堂・諸社、悉破壊顛倒」の状態に陥ってしまった。そのため

に、衆徒(別当坊)らは、くりかえし幕府法廷に訴えて、惣別当の改易を余儀なくさせている。また、その経過のなかで、惣別当に代わつて、「修理造営」は、「衆徒沙汰」として遂行すべき覚悟あり。と発言するに及んでいる。

さらには、建武元年衆徒等申状そのものが、長期間ないがしろにされていた「金堂・本尊・塔婆・楼門以下堂社等」の「造立」(修理造営)の費用に充てるために、「便宜料所」(所領)を賜るべきことを訴え出るべく、幕府崩壊・新政府樹立のどさくさのなか、必死の思いにて、かれら別当坊が起草したものであった。

そして、かれらが訴え出たその先は、北畠顕家を首班とする「奥州国方」(多賀国府)、ならびに足利直義を首班とする「鎌倉御奉行所」の両所なのであった。

だからこそ、その文中には「諸堂・諸社悉破壊顛倒」のありさまにあわせて、幕府任命の代々別当らによる「修理不法」の積み重ねが、事細かに書き連ねられていたのであった。

同じく、近世以降においても、「何事か大きな災難・危機に直面して、よく個々の支院・住僧の力が結集するというのが、一山寺の特徴」になっていた。すなわち、「坊跡を継ぎ、寺域を管理し、法務を謹仕し、寺宝を護持して、一山の宗風を伝えて」くることができたのは、「血縁・世襲」の網の目のようなネットワークによってかたちづくられる別当坊（衆徒）の連帯。それあればこそそのことであった。

かれらのもとには、地域の人びとによる厚い信頼がよせられていた。そればかりではない。ばあいによっては、「血縁・世襲」のネットワークをかたちづくるのに不可欠の要員を、すなわち跡継ぎや妻室になるべき子女を、地域の側から迎えられることさえもできた。すべてが、『中尊寺史稿』の力説する通りであった。

それならば、中尊寺一山の内実は、かれら顕密の別当坊（衆徒、いまは支院・住僧）によってかたちづくられる集合体だった。といっても、差支

えがないのかもしれない。

清衡の創建になる七堂伽藍の多くは、滅びてしまった。残されたのは、金色堂ばかりである。けれども、かれら顕密の別当坊の尽力によって、一山寺院としての威風堂々の存在感は、損なわれることなく、今日に至っている。

落ち着いて考えてみれば、そのような「一山寺院」としての成り立ちは、中尊寺だけにはあらず。隣接の毛越寺にも、隣国の立石寺・慈恩寺にも、さらには京郊の延暦・東大ほかの諸大寺にも、該当するものだったのではあるまいか。

だからこそ、中世の諸大寺には、「顕密兼習」「八宗兼学」の名のもと、顕密の院家・坊家が存在感を発揮することになったのではあるまいか。

これまでは、「大旦那」「開基」たるべき偉大な個人による、ないしは「開山」たるべきカリスマ的な高僧による、大々的かつ煌びやかな七堂伽藍の造営に目を奪われてしまつて、顕密の別当坊の大勢による持続的かつ地道な活動のありかたについては、二の次にされることが多かった。

あわせて、近世における寺院統制によって生み出された「一寺一宗」のかたちに気を取られて、「顕密兼習」「八宗兼学」の本来的な姿を見失うことが少なくなかった。

そのようなことでは、いけない。これまでの寺院史研究の方向性は、抜本的に改められなければならない。

ただし、近世以降には、瑠璃光院・金剛王院など、別当所たるべき堂宇の本来的な院号を換骨奪胎して、別当坊の多くが自らの名乗りの冠称として用いることになった。それによって、かれらは、一山を構成する「支院」としての立場を明らかにすることになった。

すなわち、「古院」とも称されるべき堂宇がもつ本来的な院号と、それぞれの別当坊が名乗る二次的な院号との間には、一線を引いて考えなければならぬ。混同してはいけない。

いずれにしても、別当坊は、もはや、それぞれの堂宇の世話人にはあらず。院号を名乗ることに

よつて、かれら自体が、それぞれに、名実ともに、宗教活動の主体になることができた。そのことが明らかである。

けれども、山王社の別当が常住院南谷坊、おなじく白山社が法泉院小前沢坊、金色堂が金色院竹下坊ほか、変則的なケースがなかったわけではない。また、大長寿院西谷坊は本来的には、「大長寿院」（二階大堂）の別当なれども、鎌倉期には「経蔵」別当職を兼帯するようになった。そして、「大長寿院」（二階大堂）が失われた後には、「経蔵」別当職だけを専守することになって、今日に至っている（『中尊寺史稿』）。

清衡が開いた「関路」とは

中尊寺の七堂伽藍の創建にあわせて、「多宝寺」と「一基塔」の「中間」に、清衡が開いたとされる「関路」（「寺塔」下注文）とは、「多宝堂（塔）」北側の「古道」が、烏兔坂（うとさか）を上り、山頂上の「一基塔」に向かっている。さらに、その道筋の延長は、蓮台野方面に下つて、丘陵の西麓を迂回して、

衣川の渡河点(たたら石方面)をめざしている。烏兔坂を越える道筋ということでは、いまの「町道上西谷線」に一致している。その「多宝寺」(「伝金堂跡」)から「一基塔」に向かう烏兔坂の道筋こそが、清衡の開いたとされる「関路」(奥州縦断の幹線道路)に相当するものだった。と考えることができるのではあるまいか。

もうひとつ、清衡が開いた「関路」といえば、月見坂を登ってくる現在の主要な参詣路(メイン・ルート)も、それとして数えられるのではあるまいか。

すなわち、月見坂を登ってくる長大かつ急坂の参詣路は、柳之御所跡における新設の「宿館」(政庁)から延びてくる参詣路の延長として、あわせて毛越寺から花立方面に迂回して月見坂の麓(坂下)に至るように付け替えられた奥州縦断の幹線道路(「奥大道」の前身)の延長として、すなわち新たな参詣路兼奥州縦断の幹線道路として、清衡によって取り立てられることになったのではあるまいか。

逆にいえば、それより以前においては、毛越寺方面から、峯葉師堂や前後左右の峰々の峰塚を、さらには「鶏足洞」を拝みつつ、山越えの道を経て、「化粧坂」の曲がりくねった道を登って、地藏院・弁慶堂の辺りに達する。そこから先は、中尊寺本坊や「伝金堂跡」(実は多宝寺跡)を経て、「町道衣の関関所跡線」を経由して、麓の蓮台野方面に下る。さらには、丘陵の西根を迂回して、衣川の渡河点(「たたら石」)をめざす。という奥州縦断のメイン・ルートとして存在していたのではあるまいか。

本来的には、こちらの「化粧坂」を経由する「旧道」の方が、毛越寺方面からダイレクトに衣川の渡河点をめざすということにおいては、合理的かつ無理のないルートだったのに違いない。こちらのルートならば、花立方面に迂回して、月見坂の麓(坂下)に至る必要がない。そのうえに、月見坂の長大な急坂を一気に上るといふ困難に対処する必要がない。

逆にいえば、どのように考えても、長大かつ急

峻な月見坂ルートの取り立ては、柳之御所跡の宿館(政庁)からのアクセスを優先するという政治的な動機によるものだった。とするほかにはない。ふりかえってみれば、烏兔坂についても、また

然り。関山丘陵の最高所近くに「一基塔」を建立して、仏教立国を高らかに宣言するという政治的な動機がなければ、そこまでいたる「関路」を新たに開く必要もなかったのである。これまでのように、「町道衣の関関所跡線」を経由して、麓の蓮台野方面に下る。という「旧道」(奥州縦貫の幹線道路)で済ませることができたのである。

すなわち、月見坂・烏兔坂が、清衡によって開かれた「関路」の象徴だったとするならば、「化粧坂」は清衡以前から存在していた「旧道」(奥州縦貫の幹線道路)の象徴にはかならない。そういうことだったのではあるまいか。

ただし、その「化粧坂」のルートは、合理的かつ無理のない本来的なありかたからして、清衡以後にも使われ続けていたらしい。

たとえば、峯葉師堂跡のあたりに立つ鎌倉期の板碑群(弘安□・弘安八・嘉元二、『中尊寺史稿』)によっても、その「化粧坂」のルートが、清衡以後にも使われ続けていたことが察知される。

しかし、近世に入り、奥州道中(街道)が整備され、その平坦な道筋が月見坂を上ることはなく、その麓を通過して、「たたら石」より下流の新たな渡河点をめざして北上するようになったあたりには、平泉方面から旧来の渡河点「たたら石」を目指す幹線道路としての月見坂の役割は失われてしまった。その代わりに、月見坂には、杉並木が植えられて、中尊寺の表参道としての性格を際立たせることになった。

あわせて、「化粧坂」の山越えの幹線道路を辿って、旧来の渡河点「たたら石」を目指す人びとも、ますます少なくなっただろう。さらには、中尊寺に詣でるにしても、時すでに、奥州道中から月見坂の表参道へというルートの利便性に抗すべくもない。

そういえば、「化粧坂」ルートの要衝を占めて

いた峯薬師堂（願成就院、別当は中之坊）が、月見坂を登った現在地（いまの本坊付近）に移転してきたのは、元禄二年（一六八九）のことであった（『中尊寺史稿』）。そのあたりには、「鶏足洞」の霊場に立ち寄る人も、少なくなっていたらしい。そのことは、清衡以前から存続してきた「化粧坂」ルートへの衰微を物語る、なによりもの証明だったのではあるまいか。

そして、南谷は円乗院桜本坊の別当所たるべき「阿弥陀堂」（蔵王権現堂）を兼ねる）や、烏兎坂上は釈尊院上西谷坊の別当所たるべき「釈迦堂」が、いずれも、本来的な在所にはあらず。近世には、「寺院の中央」たるべき山上広場の辺りに移転させられているかに見られる。その背景にも、峯薬師堂に共通する交通事情の変遷があったのではないか。すなわち、南谷や烏兎坂における幹線ルートへの衰微によって、「阿弥陀堂」や「釈迦堂」の本来的な在所では、参詣が難しくなる。その利便に資するためには、山上広場の金色堂の近くに移転させるほかない。とするような判断があったの

ではないか。

ただし、円乗院桜本坊や釈尊院上西谷坊そのものは移転することがなく、近世以降には「寺院の中央」から隔遠の、ないしは奥まっているような印象が強まっているのにもかかわらず、その本来的な在所に踏み止まっている。それによって、中世以来の伝統をしつかりと維持している。

ふりかえってみるならば、山王が岳や金峯山を仰ぎ見る南谷のあたりにも、毛越寺方面から、「鐘ヶ岳」を拝みつつ、山越えの道を経た辿りつく「旧道」があったようだ。

この南谷経由のルートもまた、「化粧坂」のそのの脇道として、関山丘陵を越えて、衣川の渡河点（「たたら石」のあたり）に通じる奥州縦断の幹線道路として、清衡以前から、そして清衡以後においても、利用されていたようだ。ばあいによっては、こちらのほうが脇道にはあらず、本道と見まがうような状態があったらしい。

だからこそ、この南谷ルート上に位置づけられ

る山王社（南谷坊）や金峯山・蔵王権現社（桜本坊）、そして大日堂（池辺坊）・千手堂（観智坊）などが、清衡以前における成立を称することができ、基盤がかたちづくられることになったのではあるまいか。

さらにいえば、同じく、そのルート上に位置づけられることによって、天治三年（一一二六）、南谷の入り口は大池付近における、あの「鎮護国家大伽藍」（供養願文伽藍）の造営もまた、可能とされることになったのではあるまいか。

落ち着いて考えてみれば、清衡による「関路」開削のプランにしても、これまた、空白のキャンパスの上に描き出されたものにはあらず。既存の奥州縦断の幹線道路を前提にして、その一部に関して、迂回路を新設する。という限られたものであった。なにかから何まで、清衡の営為というわけにはいかなかったのである。

（付記 毛越寺から鶏足洞・化粧坂方面に至る道筋の詳細については、あわせて掲載の八重樫

忠郎「新発見・毛越寺経塚と鶏足洞」を参照されたい。また、小論とは別に、入間田「中尊寺成立史考」を準備している。くわしくは、そちらの方に準拠していただければ、さいわいである）。

プロフィール

いるまだ のぶお

昭和17年宮城県生まれ

東北大学教授 東北芸術工科大学教授

著作『藤原清衡』(ホーム社) など

東北大学名誉教授

『静寂』

菅原 正二

無音は必ずしも静寂を意味しない。

静寂とは風景であり、そこにはそれなりの音が存在するものだ。

数十年も前の事だった。ぼくは一人で中尊寺の本堂前に立っていた。と、「やあ、シヨージ君」前方から囁かれた声があった。近づいて来たのは衣を纏った佐々木邦世君であった。

「やあ、…ここは静寂でいいね」と、僕は一関一高時代の同級生だった彼に向かって、そう言ったらしい。

言ったぼくは忘れていたが、言われた側の彼はその時の「静寂」という言葉を長く心にとめていたらしく、つい最近になって、その時の事を告げられた。何故だろう。

しばらく考えた後、おぼろげながらこう思った。

中尊寺の山内支院を住処とする彼は、四季折々、朝な夕なに中尊寺の真の静寂を知り尽くしておるはず。

だからであろう。ぼくが気軽に言った言葉の意味を、それ以上に重く受けとめたのかも知れない。あるいは、年中ジャズ・オーディオの世界に浸っている人間が、よもや「静寂」などという言語を発するとは、と。

いずれ、賑やか処も決して嫌いではない彼だが、実は独りで居る時には本当の静寂を極めて暮らしていたに相違ない。その姿も静寂な風景であり、遠くで鳥の声などがする。

すがわら しょうじ

(ジャズ喫茶ベイシー店主 一関市)

昨年十二月まで、朝日新聞／岩手版にコラム執筆。一三年間で162回を重ねた。東日本大震災の半年後には「岩手ジャズ喫茶連盟」として、平泉・毛越寺でカウント・ベイシー楽団による震災チャリティーコンサートを主催。



回想

この前、中尊寺に来たのは昭和十一年の春で落花繽紛なる中であつた。

人も旅人われも旅人春惜しむ

こんな句を作ったことを覚えてゐる。

青柳

私はずっと奥の西物見台の方へ行つた。杉の木にからんで、つるでまりが咲いてゐる。眼の下を流れてゐ

る衣川をへだてたむかうの森で、郭公が鳴いてゐる。遠いが、力強く、カッコン、カッコンと鳴いてゐる。そこに能舞台がある。萱で葺いた厚い屋根をもつてゐて、とても趣きがある。自然の立木や空を背景にした舞台上で草の上に乗つて見物する。まことに素朴で雄渾だと思ふ。今も雨上りの霧が橋懸に吹き荒れてゐる。

山口青柳「みちのくの初夏」より

(『回想の南瓜』昭和四十年／角川書店)。



了翁禪師と中尊寺経〈講演抄録〉

佐々木 邦 世

了翁禪師は、江戸時代初期の寛永から延宝元禄時代における黄檗僧、台密禅三宗兼学の沙門です。東叡山勸学講院の開祖であり、また、関東天台の古刹から近畿や九州の禅寺を遍歴し、比叡山や高野山、黄檗山等々有縁の諸寺に大蔵経を寄進していて、公開文庫の先駆けともいわれます。江戸の大火後は被災者救済に大いに貢献して、社会福祉事業の実践者でもありました。

了翁禪師は、寿像や元禄五年（1692）建立の頌徳碑が寛永寺境内にあります。しかし、紫衣事件で出羽に流された沢庵や一切経を開版した鉄眼、清貧に甘んじ自由奔放に生きた良寛のように、世に広く知られてはこなかったようです。了翁禪師ゆかりの地でも、一般に漸く識られるようになったのは、昭和四十五年に寛永寺に禪師の顕彰会（会長土岐善麿）の賛助で了翁堂が建立されたところからのことでしょう。

* 寛永18年（1641）12歳 岩井川村龍泉寺（曹洞宗）に年季奉公に出され寺男として働いていたが、加賀の浪人齋藤自得のはからいで出家。了然道覚と称した。

* 寛永20年 14歳 須川岳を越えて陸中（岩手県）に行脚。中尊寺に詣でたが、藤原氏の納経「紺紙金泥大蔵経」の散佚したるを嘆き、近隣を探し六巻を返納してもらった。そして心肝を砕き、「一生の間に大蔵経を集めさせ給え。もし成就しなかつたならば大般若経六百巻を書写せしめ給え」と誓願の念を抱いた。

これが発展して了翁終生の図書館事業と、二十一カ寺への大蔵経納経の大願を果たすこととなる。

まず、岩井川村龍泉寺は、秋田県の東成瀬村ですから、焼石岳を北に眺めながら旧仙北街道を東に向かうと奥羽山脈を越えて岩手県胆沢郡へ、現在の国道397号線に沿って奥州市に至るわけです。この道筋を途中で、愛宕から衣川村へ入ると、中尊寺の杜、関山も見

生誕のご当地、秋田県湯沢市で広報に禪師の物語が毎月掲載されたのは昭和六十二年のことでした。

私が、了翁禪師の実績として関心をもったのは、大蔵経（一切経）を寄進した寺院が二十一カ寺にも及ぶという業績です。天台宗・真言宗・禅宗（黄檗宗）それぞれ七カ寺へ納経寄進し、あるいはまた経蔵造営までもと、大願を果たしているのです。

それら「大蔵経」購入の巨額の対価を毎度賄い得たのは、これは禪師が夢に感得した霊薬「錦袋圓」を上野池之端の本舗で頒布して、その莫大な収入を財源としたわけです。

ところで、少々気になるのは、了翁のその大きな志願の機縁が、平泉中尊寺経蔵での一念にあつたという所伝です。

平成二年に女性仏教社から出版された川瀬信雄著『名僧了翁禪師』を読み、また湯沢市で二〇年前から学習活動してきた「了翁禪師研究会」による禪師略年表があります。その要旨を引くと、こうあります。

えてきます。後に天明の世、旅に生き旅に死した菅江真澄も、旅の大半を秋田で過ごしていますが、また胆沢の地を基点に『かすむ駒形』『雪の胆沢辺』と、平泉地域を訪ねていることも思い併されます。

それが、「須川岳を越えて」、中尊寺に詣でたという。その経路を地図に見れば、奥羽山脈沿いに山間を直歩き、狐狼化山の麓辺りから須川岳（栗駒山）の中腹を越えて、烏帽子山から祭時、そして骨寺村に入って山王山を仰ぎ、それから厳美溪、達谷窟の前を通って平泉へ辿り着いたということになるかと想います。何故、こう遠回りしたのであろうか。

さらに首を傾げざるを得なかったのは、中尊寺に詣でて経蔵に入ったが経棚は空だった。そこに在ったはずの五千三百巻ともいわれる一切経がいつか散佚して無くなっていた、拝めなかった。それで、自分が生涯をかけても探索し元に納めようと決意をしたというのです。

たとえば、信仰の道標となる経巻や「宝浄の世界」を、

観て触れて深く心に感じ、その欠けたる巻を自ら探索して収集還納せん、と思ひ立つたというのであれば領けます。それが、まだ数え14歳、得度して二年ばかりの少年の僧が、目にふれたことも無い経巻にそこまで、どうだろう。

しかも、近隣を探して、なんと紺紙金字経を六巻返納してもらっているのです。

川瀬信雄氏は、その著でこう述べております。

年令わずか14才の少年僧にとつては、大蔵経の収集の発願は荷が重すぎるように思われるが、大乘心を起こし、菩薩を行じている者にとつては、年令など問題にならないのではなからうか。

そう捉えれば、確かにそうでしょう。が、史料を読み込み現地に目を向けると、もう少し穿った見方もできます。

羽後国雄勝郡岩井川村の龍泉寺で剃髪得度した了然道覚（後の了翁）は、いつか、近隣のどこかで、紺紙金字経巻を目にしたことがあったのではないだろうか。そしてそれを蔵していた人か、あるいは龍泉寺の

三年六月の条にこう記しています。

奥州より、先度仰せ付けらる一切経二部、伏見(城)まで参着すと云々。珍重、大慶々々。早々当寺(醍醐寺)へ奉納すべきなり。いま一部は高野山へ申し請けたき上人(木食応其)の内存なり。

と、内心を吐露しているのです。ところが、この二カ月後に「先度仰せつけた」太閤秀吉が亡くなりますと、話が変わりまして醍醐寺には入らなかつた。

現在の所蔵は

中尊寺に金字経2、742巻

内15巻金銀字経(国宝)

高野山金剛峯寺に金銀字一切経4、296巻、

経宮315合(国宝)

河内観心寺に 金銀字経 166巻

金字経 50巻(重文)

静岡県妙立寺に 金字法華経 10巻(重文)

この他にも、日光輪王寺や大阪箕面市の龍安寺などに伝存、東京国立博物館や東北大学付属図書館と、いずれも「中尊寺経」として所蔵されているわけです。

その経緯経路についてはそれぞれですが、『高野春

住職からか中尊寺金字経の謂れや、奥州藤原氏の話などを聞かされたことがあったのでは、と見た方が自然ではないだろうか。

「須川岳を越えて」岩手県側に下れば骨寺村です。その骨寺村というのが、そもそも中尊寺の紺紙金銀字交書一切経を書写奉行した自在房蓮光が拓いた所であり、その田畠を寄進して経蔵別当職となった。その由緒と所領としての勤めを大切にしてきた村なのです。了然は、何も知らずにたまたまその道を辿って中尊寺経蔵へ詣でたのでしょうか。

中尊寺の紺紙金銀字交書一切経は、「落慶供養願文」に

右経巻は、金書銀字一行を挟むで光を交じわし、紺紙玉軸衆宝を合して巻を成す。漆匣を以て部帙を安んじ、螺鈿を琢いて以て題目を鏤む。

と述べています。繡と、見返し絵に仏菩薩の姿を現し、紺紙に金銀字が映えて正に装飾経の極みともいわれ、早くから世に知られていたようです。京都醍醐寺の座主三宝院義演の『義演准后日記』があつて、その慶長

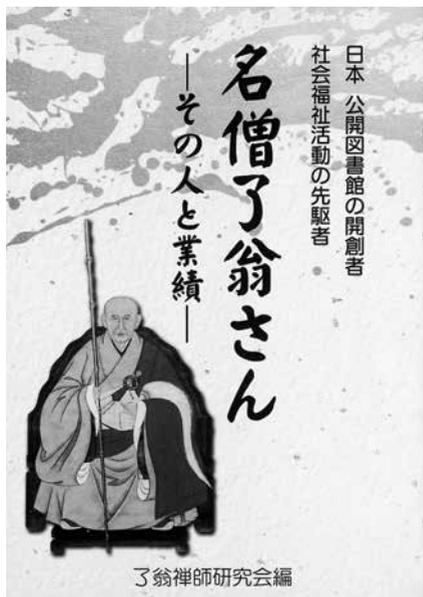
秋』には、大阪天満の伊川屋が入手して延宝七年(1679)に高野山に施入したと伝え、また、仙台藩の郷土史家として知られた相原友直の『平泉雜記』(宝曆十年)には、「太閤秀吉公、此ノ御経ヲ拝覽アルベシトテ多ク京都ニ登セラレ、其後還シ玉ハズト云ヘリ」、「畿内外諸国ニ散在セルモ有リト云リ」と記しています。

人が動くところ物も動くわけです。しかし、時代が移つても、真に尊ばれるものは人の心を動かしたのでしよう。14歳の少年が、生涯をかけて中尊寺経収集返納をと心肝を砕いて念じたこともあり得た、そう受けとめたい。中尊寺に金銀字一切経を還納することは果たせなかつたが、その大志を懐にして大蔵経を広く諸山に納めている。その業績と一念に、あらためて畏敬の念を抱くものです。

寛文十年(1670)41歳、了然を改めて了翁と号した。当時は、40歳になれば翁だったので。

宝永四年、78歳で遷化されるまでの事績学徳を今後もなお深く考察され語られていくことを期待致します。

* 本稿は、去る12月に湯沢市で開催された了翁禪師研究会創立20周年記念、『名僧了翁さん』出版記念会における講演の一部に加筆したものです。
(中尊寺仏教文化研究所長)



了翁禪師研究会編
『名僧了翁さん』表紙

法華経一日頓写経会

六月十三日(第二日曜日) 午前十時より

六万九千余字よりなる法華経八巻に開経と結経を加えた一部十巻を一日の内に書写しあげる写経会。

奥州藤原氏二代基衡公が、亡父清衡公を供養するために行ったという善業に倣い、平成九年より毎年開催しております。



現在も続く写経風景
(6月第2日曜日/法華経一日頓写経会)

詳細は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。
☎〇一九一(四六)二二二一

香花灯明

菅原光聴

一、仏前にお供えする三具足

おもてなしの気持ちをあらわすのに、部屋に明かりを灯し、花を飾って芳香を薫らせることは古今東西変わらぬ行為でしょう。仏さまや故人の精霊を供養するのにも、やはり

り明かりを灯して花を手向け、香を焚きます。これを香・花・灯明の三具足といえます。仏教ではこの素朴なおもてなしの行いに、より深い意味を感じ取ってききました。



三具足

(二) お灯明

「貧者の一灯」という『阿闍世王受決経』からとった有名なことわざがあります。お釈迦さまに献げられた阿闍世王の多くの灯りは次第に消えていったが、一人の貧しい老婆が乞食して調達した油で灯した一灯は決して消えず、世界の隅々まで照らしたといえます。この老婆は過去世において百八十億におよぶ仏を供養し、今世、献灯の布施行によつてお釈迦さまより未来の成仏を約束されたのです。一灯は未来の仏の光明だったのです。大晦日から元旦、中尊寺でも月見坂から金色堂まで約八百メートルの参道が提灯で照らされます。みな篤信の方々からの献灯によるもので、その一つ一つの提灯がたくさんの方々が無事元朝にお参りできるように足許を照らしているのです。

また、「自灯明、法灯明」という『大般涅槃经』に由来する言葉があります。お釈迦さまの滅後、仏さまの教え法に照らされながら自らの修行に精進を続けることが大切であると説いた言葉です。

中尊寺本堂内陣の灯明は、天台宗祖伝教大師最澄さまが比叡山に灯して以来、およそ一千二百年消えることなく



不滅の法灯

灯されている「不滅の法灯」です。昭和三十三年（一九五八）に中尊寺が「天台宗東北大本山」の号を許さ

れた年、比叡山より分灯されたものです。大師は「明らか後の仏の御代までも 光つたへよ 法のともしび」と詠まれました。令和三年（二〇二二）は大師の一千二百年大遠忌に祥当します。千二百年の間、先人が守り伝えてくださった灯火を子孫に伝え、「後の仏」すなわち弥勒仏下生の五十六億七千万年後までも灯明を伝えて行く。それが大師から私たちに与えられたミッションといえるでしょう。

灯明は、仏さまの光で心を照らし、その教えを脈々と伝承する行いを象徴しているのです。

(一) お花

日本では仏花として特に菊が用いられます。皇室の紋章

内を清楚に彩ります。仏教では泥中であつて泥水に著かないハスの花は清らかに開かれる悟りの心を象徴するものです。

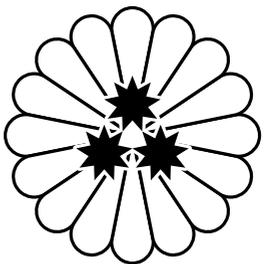
法要の際に僧侶が道場にハス形の花弁を撒く作法を「散華」といい、仏さまを讃えて天より降りしきると経典に説かれる曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼珠沙華・摩訶曼珠沙華の四華を表現しているのです。

また古来、仏堂や仏具をかざる草花に「宝相華唐草」があります。浄土の花とされ、金色堂始め中尊寺の宝物をかざる意匠にもふんだんに用いられていることから、宝相華に「山」字をあしらった「宝相華鏡 山紋」が中尊寺の寺紋となっています。（本誌裏表紙参照）

夏はハス、秋は菊花に彩られる中尊寺境内を散策し、宝相華の鏤められた仏堂にお参りいただければ、花容の先に尊く清らかな仏の心を感じることができると思います。

(三) お香

中国、隋に天台宗を開いた天台大師智顛という方がおられます。大師は「一色一香 中道にあらざるはなし」と述



天台宗章

来高貴で靈驗あらたかな花として尊ばれてきました。中尊寺で毎秋開催される菊まつりは昭和六十一年（一九八六）、藤原秀衡公・源義経公・弁慶八百年御遠忌特別大祭の年に始まった行事で、奥州藤原氏に対する供花という意味あ

いを持つています。「秋の藤原まつり」の藤原四代公追善法要や金色堂への稚児行列などとともに秋の境内を彩る風物詩ともなっています。

仏教にゆかりのあるもう一つの花といえば「ハス」です。天台宗の根本経典である「妙法蓮華経」の経題も妙なる教えをハスに形容したものです。中尊寺でも金色堂に安置されてきた奥州藤原氏四代泰衡公の首桶から発見されたハスの種子が八百年ぶりに開花した「中尊寺ハス」が初夏の境

べられました。一つの香りの中にも仏の真実の教えが込められてるといいます。また天台宗の僧侶が仏前でお唱えする「供養文」には次のように述べられています。「願わくは此の香華の雲、十方界に遍満し、一切の仏と経・法、並びに菩薩・声聞・縁覚の衆、及び一切の天仙を供養したてまつる。此の香華の雲を受け以て光明の台となし、広く無辺界において受用し仏事を作したまわんことを」（どうか、この香花の香りが雲のごとくすべての世界に行き渡り、すべての仏とその教え（法）、教えを守り伝えてくださる仏弟子（僧）をはじめ、仏・法・僧の「三宝」を讃える神々にいたるまで供養が行きわたりますように。そしてこの香華の雲が仏さまの光明の台となつて限りない世界においてあらゆる仏事が行われる助けとなりますように。）

お香によつて三宝、そしてすべての世界に供養を廻らせることを祈念してお勤めが始まるのです。ちなみに仏前で鳴らす「鐘」や「鈴」にもお香に通じる功德があります。『無量義経』には「一切の諸仏は二言あることなく、能く一音を以て普く衆の声に応ず。」とあり

ます。仏さまは一つの教えによって万人の声に応えるというのです。藤原清衡公の『中尊寺建立供養願文』では仏の「一音」の説法に鐘声を重ね、戦で無辜の死を遂げたすべての生命を浄刹に導きたいと願ったのです。香花の香り、鐘の音が廻り行くように、仏の教えがすべての世界に行きわたることを願ったのです。

お灯明に照らされながら日々手を合わせることによって心に開いた花。そのささやかな修行の功德が自分だけでなく過去から見守ってくださる仏さまやご先祖、共に今を生きる家族や、知らぬうちにお世話になっている世の中の人々、さらに未来に続く子孫に至るまで、香の薫り、鐘の声に乗って廻っていくことを願う。三具足を供えたら、お経やお念仏、少し時間がとれるのならお写経や坐禅でも。一日の中のわずかな時間が自分と自分の周りの世界を浄めて行く、大切なひとときとなることでしょう。

二、奥州藤原氏の三具足

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』によると、中尊寺を建立し

た藤原清衡公は入滅の年、あらかじめ死後の菩提を祈る

「逆善」の行に入り、百カ日の結願の日、仏号を唱えながら眠るように閉眼して果てたと伝えられています。金色堂の仏前、ひたすら修行に没頭した晩年の清衡公のお姿が眼に浮かびます。当時の金色堂で用いられた「案」という香炉や経本を置く机が遺されています。また「華鬘」という金銅製の花輪をかたどった荘嚴具も遺されています。金色堂の隣に建つ経蔵には「燈台」も伝えられています。いずれも国宝に指定され、今は宝物館讚衡蔵に展示されています。案は、もとは美しい螺鈿細工の草花で飾られていたと思われませんが、今はほとんどが剥落しています。ただ、その側面に一片の螺鈿が残っています。その形をよく見ると、羽のついた生き物、蝶です。おそらく当初は螺鈿の宝相華唐草が咲き乱れる中を舞っていたのでしょう。蝶といえは案の置かれたその先、清衡公の眠る金色堂中央壇の格狭間に宝相華の周りを優雅に舞い遊ぶ蝶の群れがデザインされているのです。（表紙参照）中尊寺仏教文化研究所長の佐々木邦世師によると、昭和二十五年（一九五〇）、金色堂須弥壇の中に眠る奥州藤原氏四代公の御遺体学術調査の



同右（部分）の蝶形螺鈿



螺鈿平塵案



螺鈿平塵燈台



金色堂中央壇格狭間（部分）の蝶文

折りに中尊寺を訪れた画家の川端龍子が、時の執事長・佐々木實高師からこの蝶が『莊子』の「胡蝶の夢」をあらわしているという聞き、『夢』という作品を描いたそうです。そして、蝶といえはもう一つ、御遺体調査の際に発見され、今は讚衡蔵に収蔵されている金色堂中央壇の副葬品「赤木柄短刀」です。その柄の部分に螺鈿による無数の蝶が乱舞し、その先の刀身部分に宝相華唐草が銀象眼されています。もつとも現在、螺鈿は剥落し、その痕である蝶形の凹みによってその意匠を知るのみです。

蝶は幼虫からサナギとなって死んだように運動を休止し、その後成虫にかえると美しい羽を広げ空を舞うことから、古来死と再生のイメージが付されてきました。夢と現実、彼岸と此岸の境界を蝶の舞う姿によってあらわしているのです。極楽浄土の清らかな草花が咲き乱れる金色堂に蝶として転生した清衡公の精霊が棺から須弥壇、そして香薫る案へと舞い遊ぶ様子が見事に表現されているのです。

三、咲く花 散る紅葉

さて、清衡公の副葬品といえはもう一つ「赤木柄螺鈿香



金色堂中央壇棺内副葬品 赤木柄短刀



同上 赤木柄螺鈿呑口式腰刀 (柄・鑑の部分)

口式腰刀」があります。この刀の鑑と呼ばれる鞘の末端と柄の端には数匹の蜂が舞い飛び、柄中央の桜花文様に区切られて、その対極には薄の穂が秋空に垂れる様子が螺鈿象眼によって描かれています。

中尊寺境内の春は梅や桜、夏はハス、秋は菊花で彩られます。木々は初夏の新緑と晩秋の紅葉を繰り返します。横刀に描かれた蜂と薄もまた、夏の虫と秋の草の対置によって季節の移ろいを表しているのではないのでしょうか。

さて、季節の対置といえば東京国立博物館に酒井抱一の『夏草図屏風』という作品があります。また、尾形光琳の『風神雷神図屏風』という作品があります。この二つの作品は元々一つの屏風の表裏に描かれたものだったそうです。つまり、光琳の風神・雷神の対面に抱一が秋・夏の草花を描いたというのです。

風神と雷神、秋冬と春夏、月と太陽、死と生など対局にあるものがバランスを取りながら盛衰を繰り返して、恒常性を保っているという古代中国の陰陽論の考え方があります。花は開花すれば散り、新緑の木の葉は秋には紅葉とともに落葉します。今年の花、今年の紅葉はたった一度きり

あわせが廻って行くことを願う、その気持ちを繋げてゆくことが大切に感じるので。

(大長寿院副住職)

のものですが、次の季節になると再び花は咲き、木の葉は色づいてくれます。清らかな悟りの心も人の生の中で花開き、死とともに滅して行きますが、不滅の法灯のようにご先祖さまから子孫へとはてしなく伝えられて行くのです。

風神・雷神に象徴される天の営みも、夏・秋の草花に象徴される地の営みも、天地の間に営まれる人の営みも移ろいやすく、生滅の間を循環しています。花も灯りも香りもすべてのものが移ろって行くことを「諸行無常」といいます。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」と『平家物語』の冒頭に述べられるとおりです。これは「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽」(あらゆるものは移ろい行く、生まれては滅びることを繰り返すがならいである。この生滅の因習そのものを滅し尽くした寂滅の境地にこそ安楽がある。)という『大般涅槃経』の言葉によるものです。移ろい行くものの本質を観察し尽くしたその先に常に静寂な安らぎの境地があると説かれているのです。

コロナ禍といわれ先行きの見通せない毎日が続きます。香花灯明を前に移ろうものと常なるものを同時に見つめながら、ご先祖から今の私たち、そして子孫にいたるまでし



中尊寺ハス

新発見

毛越寺経塚と鶏足洞

八重樫 忠 郎

はじめに

僕が解決しなければならぬと考えている考古学的な課題は、いくつもある。文化財担当から離れて早二十年近くが過ぎたが、その間にそれらを少しづつこなしてきた。しかしながら簡単にはいかない大物が横たわっている。その一つが、中尊寺と毛越寺の山中の調査であった。

平泉に考古学という手法が持ち込まれてから七十年ほどが経ち、これまでに一部について何度か測量されたことはあるものの、誰も全容を知るものはいなかった。その理由は、中尊寺境内百四十ヘクタール、毛越寺境内五十ヘクタールと広大な広さに及び、また調査時期が、草木が芽吹く前の

春先か、木の葉が落ちた晩秋に限定されるからである。数年前から時間をみて行っていたが、いつ終わるともしれない調査といえた。

ところが昨年から疫病が蔓延し、四月以降のすべての学会や行事が中止となったのである。闘病中の方や亡くなった方が数多くいらっしやることから、このような言い方をしていいのか分からないが、このいただいた時間を有効に使い、調査を終えることができた。

調査方法

最初に行ったのは、基本となる図面の作成である。できるだけ縮尺が大きなものがいいが、A3用紙に中尊寺と毛越寺を収めるとなると、六千分の一がギリギリだった。その図に現地を歩いて得た考古学的な知見を書き込むわけだが、このような調査は踏査といわれる。

方位磁石を見ながら歩測によって位置を確認し、図面に落としていく作業を繰り返す。民家などの目印がない山中では、自分の位置を知ること

は簡単ではない。幸いに四月初旬は、町議会選挙の候補者の車が多数走っていたため、演説の声が多様な方向から聞こえたことから、双眼鏡で確認できたし、またその声が聞こえる方向によって、自分との距離を感じることができた。

野生動物には、子供の頃から慣れ親しんでいたし、遺跡の調査で何度も出会っているのに、一人で山に入ることを怖いと思ったことはない。円乗院近くの山頂で、僕の手が届かない高さの太い幹に、熊の新しい爪研ぎ痕跡を見つけた時には、この付近にこんな大物がいるんだと、むしろその自然の豊かさに嬉しくなったりくらいであった。とはいえ熊は、笹藪などに潜んでいることから、出会い頭の事故に遭遇しないように、用心していることも事実である。

令和二年三月三十日から開始。このように時間がある機会は二度とないので、休日に限らず仕事を休めるときには平日も行い、毛越寺塔山に四日、広い中尊寺境内地に関しては、二十年ほど前に一部作った図面の確認も行ったため、延べ十日間を

要した。五月十七日に終了し、その後は図面を整理している。その過程でおかしなところの修正や、足りない部分を補足するために、トータル二日再び山に向かっている。

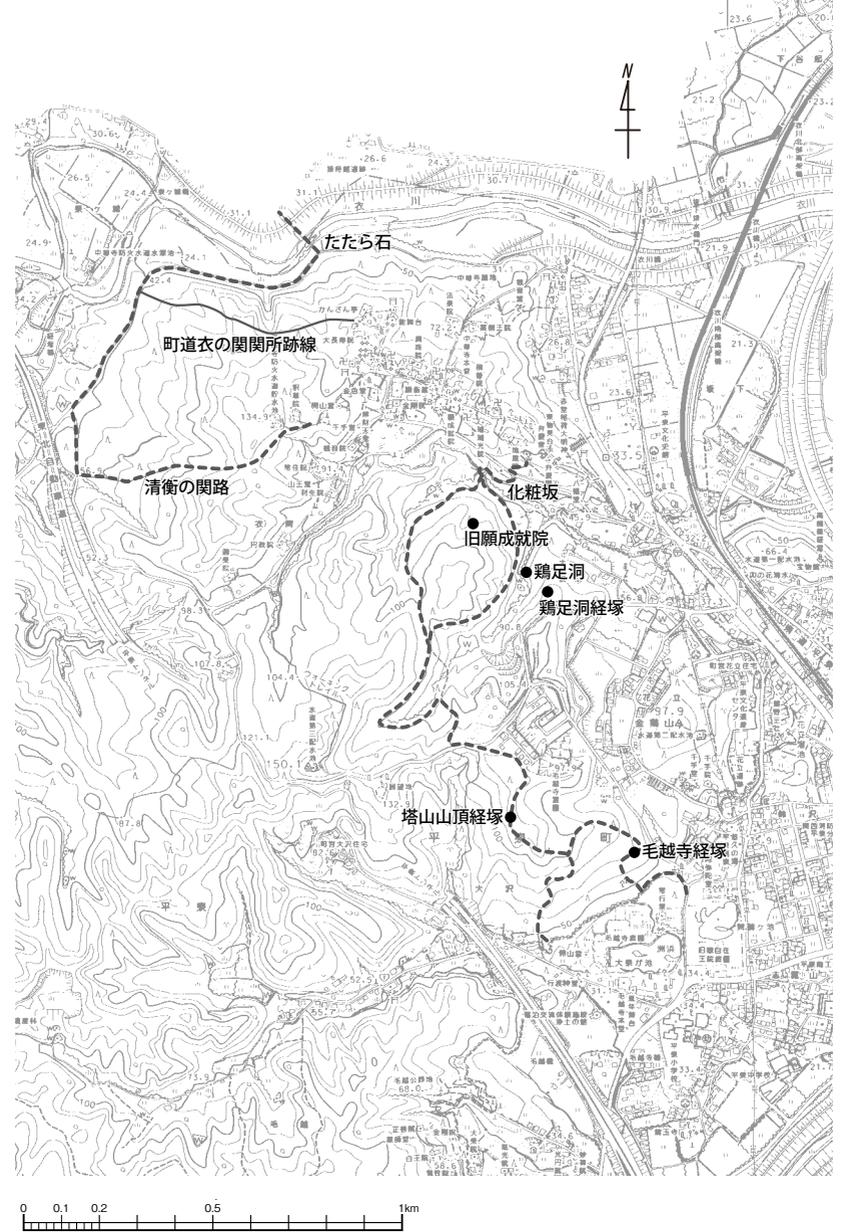
成 果

東北地方の中央を南北に縦貫している一般道は、陸路では国内最長の国道四号である。この道は、今から四百年ほど前の江戸時代には奥州道中、平安時代にあたる九百年ほど前には奥大道と呼ばれた道が、前身となっている。その奥大道の変遷について、ある程度把握することができた。

また、以前から知られていたもの以外に、寺院が設けられていたと推定される造成された平場を多数発見している。中でも斜面地を切り出して設けられた平坦地、いわゆる段切り平場は、東北地方の山林寺院の立地に照らし合わせれば、十一世紀から十二世紀の寺院が建っていた場所と断定しても差し支えない。

さらに従前から判っていたお経を埋めたタイム

奥大道の変遷と毛越寺経塚と鶏足洞



カプセルである経塚以外に、新たに様々な遺構を発見した。そしてこれらの成果は、十一月七日は中尊寺と毛越寺の僧侶の皆様、二十一日から二十三日は全国の研究者、二十九日は町民の皆様をご案内し、見ていただいている。その上でこのたび得た知見に関しては、数も多いことから別稿にて詳細に公表する予定であるが、中でも重要な発見であった毛越寺経塚と鶏足洞については、その経緯等に関してここにお知らせしたい。

毛越寺経塚

毛越寺庭園は、海や川などの自然景観をすべて取り込んだものとして著名であり、後ろの塔山までもが大泉が池に映し込まれるように造られている。南大門跡から北を眺めると、池越しに金堂円隆寺跡の白い標柱が見えるが、このラインこそが毛越寺の中軸線であった。そのラインを円隆寺跡の背後にまで延長していくと、やや右側に塔山の尾根頂部が位置することが分かる。また塔山の山頂は、南大門跡から見ると、かなり左側に寄っ

ている。とはいえ尾根頂部や山頂が、大泉が池に映るところをみれば、そこには何らかの施設があつてしかるべきではないかと、以前からずっと考えていた。

ここ数年、全国の経塚に関して調査を進めていたが、その蓄積によって経塚が造られる立地についても、ある程度において見当がつくようになった。福島県いわき市の白水阿弥陀堂の北側の山中からも経塚を発見したし、静岡県伊豆の国市の平泉とも関わりが深い願成就院の後背地からも、経塚の可能性のある塚を見つけている。

塔山山頂と毛越寺庭園との比高差は、百メートルほどである。山頂には盗掘坑がある径三メートル高さ五十センチほどの経塚があった。そしてその南東には十メートル四方の平場が造成されている。毛越寺側から見れば、平場の奥に経塚という位置関係となる。毛越寺とは距離があるため、塔山山頂経塚と呼ぶべきものであろう。

円隆寺跡の背後の尾根を踏査したときには、非常に驚いた。三基が連なった超大型経塚を発見し

たからである。南側すなわち毛越寺側の経塚は平泉最大のもので、底径十メートルほど高さは二メートルを超える。三基合わせた基底部の長さは二十メートルにも及ぶ。あまりにも巨大なために見過ごされてきたのかもしれないが、三基にはそれぞれ盗掘された跡がある。

またすぐ側に測量基準点もあった。これは昭和末期に上司と僕が立ち会って埋設したものである。すなわち何を隠そう僕自身も、お恥ずかしい限りだがあの頃には経塚だとは全く気づかなかつた。三十年の研究成果だといえればそれまでだが、自戒を込めてここに記しておきたい。あと名称については、円隆寺が毛越寺の金堂に当たるわけなので、やはり毛越寺経塚と呼ぶのがふさわしいと考えている。

類似した三連経塚は、中尊寺峯薬師経塚にも認められるが、やはり同様に中尊寺方向のものが最も大きく造られている。この両者で異なる点は、毛越寺経塚の南側に二十メートル四方の段切り平場が設けられていることである。ボーリング棒を



巨大な毛越寺経塚

刺してみた結果、礎石はないようだが何らかの施設があったことは、間違いないだろう。

まとめると塔山山頂には、毛越寺から見ると平場とその奥に経塚があり、円隆寺跡の背後にも、やはり段切り平場と三連経塚が設けられていた。経塚は弥勒菩薩が降臨するところなので、そこは神聖な場所となったわけだが、さらにその前面に大泉が池に映り込むような施設を設けることによって、毛越寺と塔山を一体とした浄土空間を形作っていたのである。

中尊寺鶏足洞

十年以上前になるが栃木県足利市で講演した折、鶏足寺から出土したという白磁四耳壺を見てほしいと、骨董屋から持ち込まれたことがあった。そのときに、鶏足寺とは変わった名前だなあと感じ、由来について調べていると、中尊寺と毛越寺にも鶏足洞という洞窟があったということを知る。しかしその洞窟を見たものはなく、中尊寺に關しては利生院の南側の山中、毛越寺に關しては

皆目見当がつかないという有様であった。

利生院南の山中でも様々な発見があったものの、鶏足洞は何度踏査しても見つからないし、何よりもありそうな地形が存在しない。鶏足洞に關しては、佐々木五大さんの稿をご参照願いたい。が、地形そのものも鶏の足形になっていると伝えられていたからである。そこでくまなく近世文書を調べてみると、最も古い一六九六年の書上には、中ノ坊願成就院の境内地にあるとしか書かれていなかった。すなわちもつと南東側の山中のことを指していたのである。鶏足洞の探索は暗礁に乗り上げたが、そのまま踏査を終了した。

すると七月二日の中尊寺白山神社能舞台維持修復協賛会の懇親会の席上でのこと。偶然に隣に座った中尊寺の宗徒でもある千葉敬道君が、「子供の頃、洞窟を見つけて、入ったりして遊んだが、暗くて怖かった」などと話していたのである。詳しく聞くと願成就院の旧境内地あたりらしい。しかし四十年以上も前のことなので行き着けるか自信がないといわれたが、明後日の午後、案内を

してもらおう約束をなけば強引に取り付けた。

その日は朝から大雨だったが、午後から小降りになったため、三時から雨合羽を着て山中に入った。すると中尊寺境内か微妙な地区で、今回の踏査では調査区外としていた沢を遡る。途中から急な崖を登り、丘陵の頂部を目指すことになる。不審に感じ「この辺で間違いないのか」と聞くと「おそらく」という曖昧な返事。

突如として目の前に、見たことのない経塚が現れた。中央に盗掘坑がぽっかりと空いていたが、大きな石が異常に多い超大型の経塚である。鶏足洞も弥勒信仰に関わることから、経塚との関係性はすぐに察せられ、この経塚の崖下こそが目的地と、案内者を置き去り一気に駆け下りた。

これが数百年間不明だった鶏足洞発見に至る経過である。振り返れば、白山神のお導きとしか思えないことの連続だった。案内をしてくれた敬道君との最後の一杯は、この上なく旨かった。

鶏の足の地形ということなので、洞窟は三方所あるであろう。二方所まで発見したが、雨で足



鶏足洞の三つ目の洞窟

場が悪いことから、この日の調査はこれで終了した。洞窟の正面には溝状の道が取り付いており、その脇には洞窟を掘ったときに出るスリと呼ばれる排土の山が、道と並行して盛り上げられている。のちに三カ所目の洞窟を発見したが、洞窟が鶏の指先に当たり、そこからズリの山が延びて一方所に集まっていた。まさしく鶏足の地形である。

全国的に見ても、このような洞窟や窟に関する信仰は、十一世紀に遡ることが多いことから、中尊寺の草創期には設けられていたと考えられる。どのようなことが行われていたのかについては、今後の調査研究に委ねるしかないが、中尊寺にとって重要な信仰の場が忘れ去られた背景には、入間田先生のご指摘のとおり、願成就院の移転によって中尊寺へのルートが変わったことが大きな要因としてあったのであろう。

おわりに

毛越寺経塚、鶏足洞経塚ともに盗掘を受けていた。里山が管理されだす江戸時代以降、経塚の存

在は多くの人を知るものだったに違いないので、避けられない結果なのかもしれない。しかしながら盗掘によって半壊状態にあった青森県平内町、岩手県奥州市の経塚の調査を行い、東北地方の経塚の内容が判明しつつある。あとは本丸ともいってべき平泉町内の経塚の発掘調査を行うだけとなっている。また鶏足洞に関しては、周辺の詳細な地形測量を行い、そのちに現況で洞窟内部の測量をする必要がある。

これらの調査に関しては、大学と連携することが近道ではないだろうか。現在、東北学院大学の七海雅人教授が中心となって行っている平泉研究に加えていただき、学際的に行うことが肝要だと考えている。

プロフィール

やえがし ただお

昭和36年岩手県生まれ

東北大学大学院修了 博士(文学)

著作『北のつわもの都平泉』(新泉社) など

現在平泉町観光商工課長

中尊寺と毛越寺の遺跡探訪

佐々木 五大

中尊寺と毛越寺を囲む山地（関山・金鷄山・塔山など）はその大部分が森林ですが、その下にはまだ多くの史跡が眠っていると考えられています。中でも写経が埋納された経塚は、これまでも数多く見つかってきました。

経塚とは、未来に仏法が廃れたり、経典が喪われたりすることを危惧し、後世に仏教を託すために築かれた、いかなればお経のタイムカプセルです。また未来仏としてこの世に現れるとされる、弥勒菩薩を期待した「弥勒信仰」の一種態であり、往時の平泉にもこれが活発であったことを示すものです。

既に発見された経塚は、山頂付近や尾根伝いに分布していましたが、今般また一基が新たに発見されたというお話がありました。調査を主導されている八重樫忠郎氏の協力により、十一月七日にフィールドワークが企画され、当該の経塚のほか、隣接する史跡群を見学する機会となりました。

まとめて最初の仏典編纂（**結集**）を主導しました。そして自らは最期の地としてこのククタパダ山を選び、弥勒菩薩の出現を待ちつつ洞穴の中で入定したということです。この故事によりククタパダ山は仏教の聖地となり、仏教が中国に伝播するにあたり「鷄足山」と訳されました。

中国においては、後世これにあやかると霊峰を見出し、仏教の聖地にしようという発想が起りました。鷄の脚を想わせるような、三つの峰を並べ持つ山岳が、鷄足山（雲南省賓川県）と呼ばれて興隆したのです。日本国内においても、寺院名・山号などに鷄足の名を見ることがありますが、これらも同じ故事に由来しています。

中尊寺祭祀にみえる「鷄足洞」

ところで中尊寺の年中行事には毎年五月四日（古来は旧暦四月の初午の日）、鎮守である白山社に「古實式三番」の祭祀を奉納しています。この式三番は開口・祝詞・若女・老女の四部で構成され、私も現在の開口を勤めさせていただいております。開口はいわゆる「翁」であり、中尊寺の縁起——この寺が大伽藍造立に相応しい、比類無き靈地に建てられていることを言祝ぐものです。

た。秋の諸催事の合間を縫った日程のため、事前調査のあらしもよく伺わずに当日を迎えてしまいました。各所で八重樫氏にご説明いただき、意義あるフィールドワークとなりました。

それぞれの史跡の特長については、本号の寄稿で八重樫氏が専門的な知見からご説明されておりますので、ご参照いただければと思います。

インドに発祥した「鷄足山」信仰

今回の行程で個人的に最も貴重な経験だったのは、新たに発見された経塚から北西方向に下りた斜面にある、「鷄足洞」と呼ばれる三つの洞穴の見学でした。この鷄足洞に隣接することから、経塚の方も差し当って「鷄足洞経塚」と名付けられたようです。鷄足洞の存在自体は以前から知られていたようで、見たことがあるという一山僧侶もいらつしやいましたが、私はこれまで全く知りませんでした。

そもそもこの「鷄足」という名称は、インドにあるククタパダ山という地名に由来しています。釈尊の十大弟子に摩訶迦葉という方がおられました。摩訶迦葉は釈尊の教旨を深く理解しており、釈尊が涅槃に入られた後は、僧団を

式三番の詞章は本来口伝であり、全文の引用は憚るところですが、中尊寺の周囲に広がる風景をインドの名勝・聖地に擬する一文があります。東に流れる北上川は、恒河の流れ「すなわちガンジス河に、西に見える山は、靈鷲山（釈尊説法の場合）に見立てられており、それに続いて、

南に重山遠くつらなつて、松柏風静かに、迦葉入定の鷄足の洞とも謂つ可し

（南には山が遠く連なり、常緑の木々の間を風が静かに吹き、摩訶迦葉が入定した鷄足の洞とも謂うべき場所がある）

という一節があります。この鷄足洞は中尊寺の霊的な外郭として、古来より意識されていたことがわかります。私の方とはというと、鷄足山に見立てられた山はあるにしても、実際に洞穴があるとは思っていませんでした。フィールドワークの行程を聞いた時はびっくりしました。

鷄足洞を目の当たりにして

中尊寺と南側の山は沢によって隔てられており、その支流を遡るように歩き、鷄足洞に到ります。沢から少し斜面を登った位置に、それぞれ十メートルほどを隔てて、洞穴



鶏足洞



鶏足洞経塚

が三つ確かに並んでおります。入口は斜め上方向を仰ぐ角度で開いているので、もし入ろうとすれば滑り降りるような格好になります。「僕が子供の頃はもつと広くて、中に入る事ができた」と話す先輩僧侶もおりましたが、いずれも内部は狭く、浸食で土砂が堆積しているため、嵌まり込んでしまう危険を感じます。

洞を前にして、「お香を焚いたものか、何らかの法楽を営んだ痕があったらしい」という伝聞を口にされる方もおりましたが、現状からは何も言えません。しかし式三番を奉演してきた先達は、きつとこの洞をイメージしつつつ役を勤められたことでしょう。私もより理解を深めてこれに臨むことができます。史跡見学で得た知識が、こうダイレクトに上達の糧になるというのも稀なことでしょう。

今後も浸食による埋没の防止や、宗教行為の痕跡調査など、機会をみて作業を行う価値がある史跡であると感じました。

鶏足洞経塚に突出した性格はあるのか

行程は前後しますが、新発見の鶏足洞経塚も迫力ある佇まいたたずでした。盛り土は直径八mにおよび、(元は塚の全面

に施されていたとみられる)積み石も残っていました。八重樫氏の説明でも「特筆すべき規模」とのことですが、すでに盗掘に遭っていたらしいことが悔やまれます。

弥勒菩薩をた持んで没した摩訶迦葉。その故事に仮託した霊地である鶏足洞に、この経塚は隣接しています。弥勒菩薩の世まで經典を残すという、経塚に共通する造営趣旨とリンクさせた部分は果たしてあるのでしょうか。そうであればこの経塚は、付近に点在する他の塚群に比べ、特別な役割を担っていると言えます。

経塚という、すでに地表に現れている史跡に限定しても、新たな発見の余地を残す中尊寺・毛越寺周辺の山々。その全貌が明確となる前途はなお遠遠です。あらためて今後の調査研究の進展に俟つところの大きさを実感しました。

(円乗院副住職)

『新しいお寺様式』

破 石 晋 照

中尊寺の参道には多くのモミジが植えられています。秋の柔らかな日差しを受け輝く艶やかさはもちろんのこと、漆黒の夜空に、橙色の星々のように瞬くモミジたちはとても幻想的です。『紅葉銀河』は、今年度で四回目を迎え、秋の中尊寺境内を彩る恒例行事となりつつあります。一昨年の開催を終えたころには、来るべき二〇二〇年も同様に紅葉銀河を開催できると信じて疑うことはなく、東京オリピックの開催後の紅葉シーズンを待ち遠しく思っていました。

二〇二〇年四月、猛烈な勢いで世界中に広がる新型コロナウイルス感染症への対策として、しばしの金色堂拝観停止を決定しました。開催予定だった秋の行事についても、そのほとんどが白紙の状態となったことは、ごく自然の流れでした。

一月半程にわたる拝観停止期間が終わり、夏を迎えるこ

ろからは少しずつ参拝客を受け入れられるようになりました。コロナ禍において参拝される皆様は、『新しい生活様式』にのっとり、お互いに譲り合い、気を付け合いながら境内の散策を楽しまれました。今までは無かった新しいルールは、大変な状況であればこそ、仏様の前で手を合わせたという人々の思いの中に生まれた『新しい参拝様式』だったのだと思います。そのような状況であれば、『紅葉銀河』の開催も可能ではないかと模索するようになったのは夏休みの終る頃です。

ちょうどその頃、毛越寺の同級生の僧侶と一緒にラジオ番組を担当する機会をいただきました。彼女とはこの数年間法話の会を一緒にしており、一昨年も、一年間に何度となく二人で法話の会をしてきました。『布教』は僧侶の役目の大半ですが、二〇二〇年は人が集うことが難しい状況の下、私たちは法話での布教の道が半ば絶たれてしまっていたのです。しかし、ラジオを通し聴取者の皆さんとのメッセージのやり取りを行う中で、これまでにはなかった情報発信の場ができあがろうとしています。また、秋に差し掛かる頃には、通常の法話も少しずつ開催できるようになり

ました。今までのように狭い会場にたくさんのお客様というわけにはいきませんが、ガイドラインを守り、それぞれに予防対策を万全にしたうえで法話の会、あるいはインターネット回線も使い、リモートで聞いていただけるような法話の会など、たくさんの方のアイデアを持ち寄っていただき、我々の力では半年間近く開催できなかった布教の場を作っていたできました。たくさんの方の協力があり、これまでになかった『新しい布教様式』を作ることができたのです。

かくして紅葉のシーズンがおとずれました。モミジたちは例年と変わらず色づき始め、そして前回同様、数百灯のライトが夜空にモミジを浮かび上がらせました。非常に困難な状況下ではありましたが、できる限りの対策をして『紅葉銀河』の開催を決定したのです。参道に並ぶモミジの葉は、橙色の天の川のように輝き、その天の川の下では、やはりルールを守り『新しい参拝様式』でモミジを眺めるご参拝のみなきまが歩いていました。

二〇二〇年は『新しい生活様式』の下、私たちの生活様式は大きく変わることになりました。それは、今まで当た

り前のように行っていたことができなくなり、人と人の間に距離を作らなければならない哀しい生活様式です。しかし、そのような制約の中にありながらも、知恵を絞って、万全な対策の下に行事を行い、そこに集まった人々は、お互いに思いやりながら楽しい空間を共有する可能性はのこされました。『新しい生活様式』の下でも人々が集い、思い合える空間を創造し、提供することが『新しいお寺様式』なのかもしれません。

(金剛院副住職)

山田俊和前貫首 県勢功労者に

るとともに、文化財の積極的な保護を通じ、本県における文化の振興に貢献した。
東日本大震災津波の発災後、支援物資等の提供や震災物故者の慰霊法要など、物心両面からの災害支援に尽力し、復旧・復興に貢献した。

（報告 総務部）

岩手県の発展に尽くし、功績を残した人に贈られる、令和二年度の県勢功労者表彰式が十二月十五日に開かれ、中尊寺前貫首山田俊和前貫首はじめ六人が表彰されました。発表は五月十五日。例年は表彰式も五月実施でしたが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から延期され、十二月の表彰式となりました。誠におめでとうございませう。

県庁発表事績

天台宗東北大本山関山中尊寺貫首として、奥州藤原氏が理想とした平和思想についての普及啓発活動やイコモスの現地調査への対応等を通じ、「平泉の文化遺産」の世界遺産登録の実現に尽力した。

「平泉の文化遺産」の世界遺産登録後も国内外に向けて世界遺産の価値を発信し続け、地域振興に寄与す



達増拓也知事から表彰状を受け取る山田前貫首

（郵便受けから）

風信 / 語録

この度は、自分達のためにお忙しい中、多くのことを教えてくださり、ありがとうございました。和尚さんのお話の中で自分達の地域との関わりや歴史への関心が深まりました。

今回知ることのできた中尊寺という歴史の深いところと関わりのある自分の地域への誇りを大切にします。

秋田県大館南中学校三年生一同
山の葉が赤く色づき、少しずつ寒さが増してきました。
先日、中尊寺を見学させていただき、ありがとうございました。私たちは、インターネットなどでしか、中尊寺のことを知りませんでした。実際に行ってみて、

中尊寺は、敵も味方も関係なく、すべての霊をなぐさめるために建てられたということがわかり、とてもすてきだなと、思いました。

また、金色堂を見学してみて、清衡公、基衡公、秀衡公の亡きながら安置されていることを知りました。このようなことから、仏教の尊さを改めて感じる事ができました。また、ガイドさんからの説明を聞き、秋田県とつながりがあることを知り、驚きました。そして、中尊寺を以前より身近に感じることができました。

今度また、家族で中尊寺に行く機会があったら、改めてゆっくりと見学したいと思っています。本当にありがとうございました。
大仙市南外小学校六年生一同

学習旅行では、中尊寺や金色堂について教えてくださりありがとうございました。

私は、はじめて世界遺産の金色堂を見ました。写真で見るとてもきれいでした。金色堂には藤原氏四代がねむっていることが分かってとてもおどろきました。
中尊寺には、仏像やいろいろな昔の物があって歴史を知ることができました。境内を歩きながら、様々な事をお話いただき、遠い昔に思いをはせることができました。

いろいろなことを教えてください。本当にありがとうございました。
盛岡市 小学校六年 M・R

「清衡公の願い」

そして先人たちの言葉

千葉方彩・土方香茗 二人展《開催報告》

昨年八月二十七日から九月二日まで、中尊寺本堂を会場として、「清衡公の願いそして先人たちの言葉」千葉方彩・土方香茗二人展が開催されました。

平成二十八年、藤原秀衡公の御母が延暦寺の澄憲僧都に託して制作した『如意輪講式』を八百五十年ぶりに復元、僧俗一体となつて法要が執り行われました。

千葉方彩さんはその前年、山田俊和前貫首から「秀衡公の御母の請託により作られたものであるから、地元的女性の手で」と依頼され作品を制作、「如意輪講式を書く」――千葉方彩書作展―を開催された方です。

千葉さんから二人展についての相談を受けたとき彼女は、「わたしたちのふるさと岩手には、奥州藤原氏初代清衡公

をはじめ、多くの先人たちがいます。長年の書友である土方香茗さんと、『中尊寺建立供養願文』、そして岩手にゆかりのある先人の詩歌、名文などを作品とし、あわせて二人の現在にいたるまでの作品を展示、書道と言葉の力を伝えたいと思います」

と、熱い思いを語られました。

後日、お二人は中尊寺を訪れ開催を申し込み、二人展の開催は決定しました。しかしながらコロナ禍により、さまざまな社会活動が延期・中止・自粛されている中、開催できるかどうかお二人はさぞ不安だったことでしょう。岩手の新型コロナウイルス感染症の発症者がその当時はまだ少数であったこと、そのほか諸々の運に恵まれ、開催にこぎ着けたものです。

わたしは、「二人展が開催できたのは、如意輪観音さまのご加護によるもの」と感じました。

次ページ以降に作品の写真を掲載し、開催報告といたします。

（葉樹王院住職 北嶺澄照）

『中尊寺建立供養願文』より

（行草書）

一音所覃千界不限拔苦与楽普皆平等官軍夷虜之死事古来幾多毛羽鱗介之受屠過現無量精魂皆去他方之界朽骨猶為此土之塵每鐘聲之動地令冤靈導淨刹矣

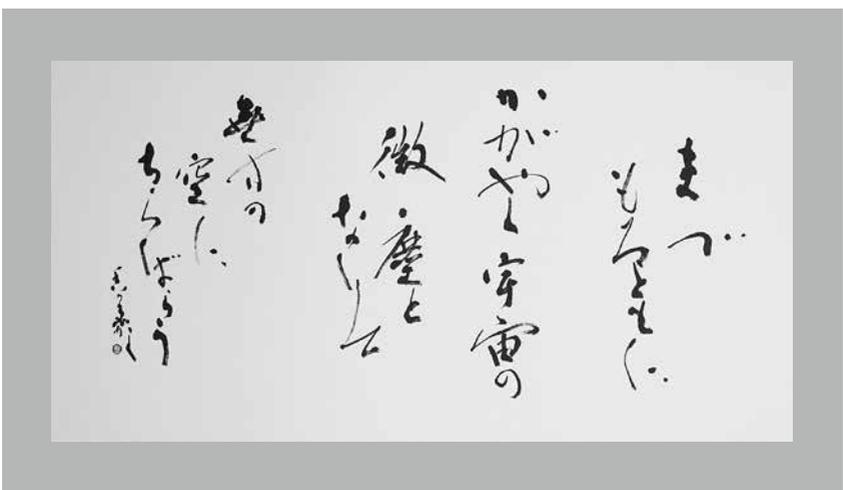
千葉方彩

『中尊寺建立供養願文』より

読み下し文（漢字かな交じりの書）

一音の覃ふ所千界を限らず。拔苦与楽、普皆平等なり。官軍夷虜の死事古来幾多なり。毛羽鱗介の屠を受くるもの、過現無量なり。精魂は皆他方の界に去り、朽骨は猶此土の塵と為る。鐘聲の地を動かす毎に、冤靈をして淨刹に導かしめん。

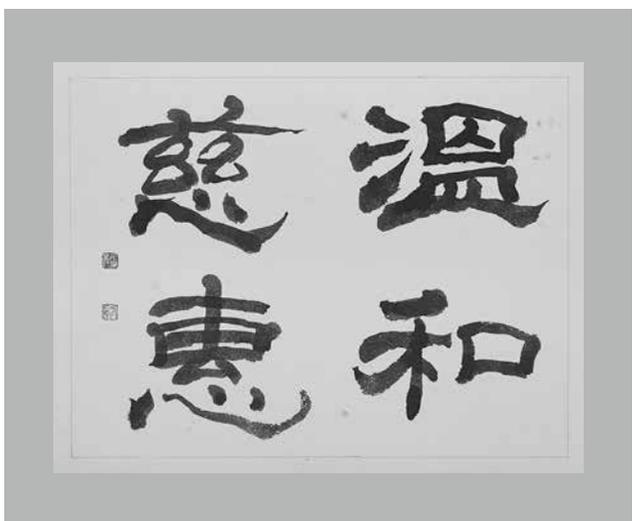
土方香茗



宮澤賢治『農民芸術概論綱要』より
(漢字仮名交じりの書)

まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう

土方春若



温和慈恵

(隷書)

千葉方彩

〔表紙解説〕 仏教と孔雀

本号の表紙は「金色堂中央壇格狭間孔雀」を編集会議に提案し、その場で決定されました。

『仏説阿弥陀経』には、極楽浄土の鳥として六種類の鳥が名前を連ねています。金色堂内には二種類の鳥が。内陣格狭間の孔雀と堂内を荘厳していた金銅華鬘けごん（現在は宝物館讃衡蔵にて保存）にあらわされている「迦陵頻伽かりようびが」です。極楽浄土をあらわした皆金色の仏堂にふさわしいといえるでしょう。

さて、孔雀といえば、毒蛇を食う孔雀を神格化した明王みょうおうが孔雀明王で、一切諸毒を除く、とされます。

孔雀明王を本尊として執り行われる密教の修法を「孔雀経法」といいます。十世紀には請雨しょうう（雨乞い）のために修されるが多かったようですが、十一世紀に入ると除病延命（病気を除き、寿命をのばすこと）、天変（天空に起こる異変及びそれによりもたらされる災害。暴風・大雨・雷・日食・月食など）消除の祈祷として盛んに行われたと

伝えられています。

金色堂は極楽浄土をあらわした建造物です。堂内に孔雀がいる。そしてもう一つのとらえかたとして、一切諸毒を取り除く孔雀でもある。そう考えることもできるのではないか。もしかすると、奥州藤原氏初代清衡公には、二つの意図があつた可能性があるかもしれない、と私は感じて表紙を「孔雀」にと提案したのでした。

「南無孔雀明王」、新型コロナウイルスという毒を悉くていじく除かれんことを。

(中尊寺仏教文化研究所主任 北嶺澄照)

キノコ

初舞台は七つの頃、春の御事奉能の「竹生島」だった。三十年以上も前のことで、ほとんど記憶に残っていないが、肌寒くて薄暗い楽屋から舞台に出ると、春の陽気と桜香がする風が包んでくれたことは覚えている。私は、春の能舞台のその心地良さをいつも楽しみにしており、「桜の匂いのするあたたかい場所」をフワフワと漂っているだけで、いつも滞りなく舞台を終えることができた。

実は、そのころの能舞台には妖精がいた。桜香のするその妖精は、いつも私の背後にとりつき、滞りなく演じることができるよう促してきてくれて、私が幕に帰る時には「また来年ね」と言って妖精はどこかへ去って行くのだった。

大人になって帰山の後、私はまた子供の頃のように御事奉能に出るようになった。初舞台と同じ「竹生島」を演じるとき、例の桜の妖精のことをふと思い出し、久しぶりに会ってやろうと思った。幕が開くと昔と同じ春の匂いがある。舞台上では必死で妖精を探した。そして自分の役が終わった後も妖精の出現を願いながら、ゆっくり／＼幕に帰った。

妖精は出てきてくれなかった。稽古が足らなかつたのかと思いつし、次はとにかく一生懸命稽古をして舞台上上がったのだが、ついに妖精は姿を見せてくれなかった。今秋、私は寺の裏山を散策していた。獣道に入り森の中を歩いていると、私の進行方向に突如としてふわっと白い「何か」が見えた。

「あの時の妖精か!?」枝をかき分け、喜び勇んで駆け寄ると、それは大きな白いキノコであつた……。しかし、これがまた見事で、傘は二〇センチ以上。私に見つけられる直前まで、森の木陰でドンジャラホイと踊っていたのではな

いかと思わせるほどだった。なるほど、不惑の歳を過ぎた私には、春の桜の妖精は見えなくなつたが、秋の毒キノコの妖精は見えるようになったのかもしれない。



キノコ

新刊紹介

二〇二〇年一月〜十二月

〈書籍〉

『平泉の文化史1 平泉を掘る 寺院庭園・柳之御所・平泉遺跡群』

吉川弘文館 監修：菅野 成寛 編者：及川 司 三・十

『平泉の文化史2 平泉の仏教史 歴史・仏教・建築』

吉川弘文館 監修：編者：菅野 成寛 七・十

〈報告書〉

『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集 骨寺村荘園遺跡確認調査報告書 駒形45—4地点』

一関市教育委員会 三・二十三

『岩手県文化財調査報告書第158集 平泉遺跡群発掘調査報告書』

『柳之御所遺跡—第80次発掘調査概要—』

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 三・二十六



『岩手県文化財調査報告書第157集 平泉遺跡群発掘調査報告書
高館跡―第7、10次内容確認調査 総括編1―』

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 三・三十一

『平泉文化研究年報 第20号』

「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会

(事務局：岩手県文化スポーツ部文化振興課)

編集：岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第133集

特別史跡無量光院跡発掘調査報告書XVI―第40次調査―』

平泉町教育委員会 三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第134集 平泉遺跡群発掘調査報告書

祇園II遺跡第15・16次 伽羅之御所跡第28・29次 西光寺跡第13次

志羅山遺跡第116次 花立II遺跡第26次 中尊寺跡第89・90・91次

無量光院跡第39・41次』

平泉町教育委員会 三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第135集

名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書―第10次調査―』

平泉町教育委員会 三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第136集

祇園I遺跡第3次・第4次発掘調査報告書』

平泉町教育委員会 三・三十一

『平泉と東・北アジアの仏教思想における彼岸と此岸

―平泉の仏教的理想空間に係る国際研究会 報告書―』

岩手県 三・三十一

□日本の「原風景」を読む

原 剛 藤原書店 五月

□俳句旅枕 みちの奥へ

渡辺誠一郎 コールサク社 五月



空から見た観自在王院



無量光院の本堂があつた西島跡。史跡整備の前、周囲は水田であつた。

〔関山句囊〕

(令和二年六月)

〈第五十九回 平泉芭蕉祭全国俳句大会〉

(応募句入選)

(投句総数 七四一句)

*長谷川 權選

天 咲くことの待たるる桜道の奥

遠野市

松本 良子

句評 花を待つ思いの裏に病魔退散の願いがこもる。簡明にして深い。

地 月浮かべゆつくり自転大代田

奥州市

岩淵 正方

句評 自転しているのはいうまでもなく地球。壮大な構図の句。昼の月でも夜の月でもよい。

人 大震災の海より来るやませかな

登米市

藤野 尚之

句評 大津波を起した海から今は冷たいやませが吹きつける。底知れぬ威力を秘める海。

秀逸

森をなす一本の巨樹田植歌

大崎市

佐々木克狼

ウイルスの迫る列島花御堂

奥州市

高橋 小秋

仔馬の名加ふ慰霊碑黄水仙

南相馬市

石橋 林石

佳作

折鶴の紙の重さや終戦日

八尾市

穂山 常男

*白濱一羊選

天 刻刻とこの世の色に羽化の蟬

奥州市

加藤 次男

句評 羽化したばかりの蟬の白さはこの世の色と思えない。しかしその白さも刻刻と変わる。

地 かつこうの声復興と聞こえけり

長崎市

西 史紀

句評 東日本大震災から九年が過ぎたが、復興未だ成らず。郭公の声は励ましか、それとも…。

人 手付かざの夫の遺品や豆御飯

北上市

小笠原志保子

句評 季語から察して〈夫〉が亡くなつてから、ある程度の日が経ち、作者の心も落ちついている。しかし〈遺品〉に手をつける気持ちにはなれずにいるのだろう。

秀逸

折鶴の紙の重さや終戦日

八尾市

穂山 常男

蕉翁の句碑を去らざるかたつぶり

平泉町

鈴木 信

ここもまた通行禁止朝桜

北秋田市

五代儀幹雄

佳作

跳べさうで跳べぬ川幅猫柳

長岡市

伊藤 一二三

*小畑柚流選

天 万緑に声吸はれゆく能舞台

大崎市

砂金 元子

句評 中尊寺の能舞台を思わせる。謡が、周辺の万緑に吸はれ行く様は、正に幽玄そのものである。

地 囀を呑み込んでゆく池の黙

平泉町

岩淵 洋子

句評 囀が起り、静寂を保っていた池も、貪るかの如く受け止めてはいる。作者もその中に立ち尽くしているのであろう。

人 滴りの凹みしのちの水輪かな

北上市

下田 榮一

句評 水辺での一景。生命あるかの如く続く滴り、水辺に触れて作った凹み水輪となつて広がる。自然の営みに心奪われる。

秀逸

蝌蚪生まる泡のゆりかご中尊寺

盛岡市

工藤 幸子

おぼろ夜や山川草木みな仏

秋田市

岩谷 塵外

万緑の風に色あり岩手富士

佐倉市 小池 成功

佳作

三密を避けて写経をみどりの日

北上市 小笠原志保子

人 山繭織の疵のものへも風を入れ

奥州市 鈴木 藤子

句評

山繭の織物は丈夫で深い光沢がある。虫干しの季節、母上の遺品の絹物も「かざいれ」をしたのであろう。母上のありし日をしのぶ一句となった。

秀逸

積ん読の本に手を出す日永かな

流山市 加藤 酔歩

暁闇の目覚めうながす時鳥

多賀城市 櫻井アエコ

払暁を来て平泉の日称ふ

宮城県 水戸 勇喜

佳作

法堂の縁の下なる蟻地獄

平泉町 旭 光

*小林輝子選

天 森青蛙世界遺産の懐に

一関市 三浦 寿子

句評

中尊寺本堂の北隣に小沼がある。毎年この沼を覆う木の枝・沼岸の草などに森青蛙の白い泡状の卵塊を見ることが出来る。参道への道筋、これこそが世界遺産だと思う。

地 辛夷咲き村は静かに人の減り

宮城県 鈴木喜久郎

句評

辛夷の咲く頃、村の若者達は進学や就職のため村を離れてゆく。離れたくて離れるのではない。「静かに」で出る人の心・残る人の心が表現されている。

*渡辺誠一郎選

天 花莫産に風入れ母のすわり胼胝

一関市 稲玉 宇平

句評

胼胝には母の人生の労苦が表れている。花莫産に座つて、涼風に包まれ、穏やかな表情を見せる母の姿が浮かび上がっている。

地 九年目の折りそれぞれ目刺焼く

気仙沼市 熊谷 房子

句評

東日本大震災から、はや九年目になる。被災の記憶は人によって様々だが、鎮魂の思いは同じなのだ。これからも、「目刺し焼く」日常が、変わることなく続いてほしいとの作者の祈りが込められている。

人 鬼房に永久の胆沢や春の雪

宮城県 水戸 勇喜

句評

岩手県胆沢の地は、佐藤鬼房の母郷である。へ胆沢満月雪乃精(二三片)を刻んだ句碑が建つ。まさに鬼房にとっての胆沢は、(永久)なる地。春の雪が、(永久)なる世界を明るく包み込んでいる。

秀逸

花の雨珈琲苦きほど清し

大仙市 鈴木 仁

人 山繭織の疵のものへも風を入れ

奥州市 鈴木 藤子

句評

山繭の織物は丈夫で深い光沢がある。虫干しの季節、母上の遺品の絹物も「かざいれ」をしたのであろう。母上のありし日をしのぶ一句となった。

秀逸

積ん読の本に手を出す日永かな

流山市 加藤 酔歩

暁闇の目覚めうながす時鳥

多賀城市 櫻井アエコ

払暁を来て平泉の日称ふ

宮城県 水戸 勇喜

佳作

法堂の縁の下なる蟻地獄

平泉町 旭 光

ほうたるに逝きしばかりの兄さがす

多賀城市 櫻井アエコ

奥羽山系芽吹きて山の形成す

西和賀町 門屋 允子

佳作

戲晴れ雨滴織り込む蜘蛛の網

気仙沼市 石川喜美子

*照井 翠選

天 ゆるぎなき四方の山の桜かな

一関市 金野 幸弘

句評

コロナ禍で全世界、人類が危機に瀕している。こういう時代相において、この句に出会った。人間の営みはむなしなものだが、自然はゆるぎない存在だと思つた。この句における桜の美しさが眼前に広がった。

地 一滴は天意の光雪解堂

岡山市 森 哲州

句評

品格のある一句。この雪解堂は金色堂か。雪解の雪に作者は天の意志を想像し、その光を有難いものと感じているのだろう。尊いものが作者には見えている。

人 鷹鳩と化し年上の妻娶る

盛岡市 兼平 玲子

句評 春のどこか夢まぼろしのような気分と、年上の妻を娶ったことが、うまく一句の中で融合している。意表を突かれたが、俳味がある。

秀逸

田水張る空の光を敷きし村

大崎市 砂金^{いさご} 元子

満月を一つづつ抱く代田かな

北上市 鉄本 正人

老幹の噴く一輪のさくらばな

奥州市 梅森 サタ

佳作

言霊の漂う舞台梅雨の蝶

一関市 村上 一誠^{いっせい}

(秀逸、佳作は編者が適宜に掲出)

岩手県内 小・中学校の部 (投句総数一四一〇句)

岩手県内小学校

特選

春の朝地球が回るさか上がり

花巻市立太田小学校 四年 照井 稜央

雨やんでうんていと並ぶ虹の橋

一関市立東山小学校 五年 浅沼 陽路

春風やばくにている四番目

花巻市立太田小学校 四年 高橋 朔夜

岩手県内中学校

特選

できたての羽で飛び立つ雀の子

釜石市立釜石東中学校 三年 佐々木太一

ひとしずくあじさいに鳴る雨の音

遠野市立遠野中学校 三年 松田 美空

春の月やわらかに世を照らしけり

二戸市立金田一中学校 三年 横山 和沙

平泉小学校

特選

春の空けがしたリスとかえり道

五年 飯田 琉生

毛つう寺花びら飛んで新学期

四年 瀧澤 実央

たけのこが取って取ってと頭出す

六年 東郷 亜希

長島小学校

特選

たうえしてぼくのてつだいはこあらい

一年 高橋 一臣

かみなりさまそらでゴロゴロえんそうかい

四年 及川 二子

はるのかぜぼくとわたげでおにごっこ

一年 佐々木 駿

平泉中学校

特選

見上げればラピユタの世界夏の雲

一年 千葉 雪華

紫陽花は雨待ちわびて色づいて

二年 加藤 優真

真夏日に消え去った夢中総体

二年 千葉 迅人

第五十九回大会は中尊寺を会場に六月二十九日に開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止。応募句の中から六人の選者の方が入選作品を決め、特選句には選評をいただきました。

楸邨の碑の文字しかと夏木立

『暖響』十一月号

内田 菜穂

古都小春金色堂の人の列

『草笛』二月号

木村 利子

中尊寺へ納むる磐井の紙を漉く

『草笛』二月号

木関 借楽

青梅雨のただ中にあり青邨碑

『草笛』八月号

大澤 保子

県境を越えるは法度半夏生

『草笛』八月号

佐々木昌子

参道をひろがりのぼる梅雨の傘

『草笛』十月号

小野寺東子

母と居て消ゆるまで待つ大文字

『草笛』十月号

金 淳子

光堂白雨の後の雫かな

『草笛』十二月号

小野寺東子

読経に往き来の猫や秋うらら

『草笛』十二月号

岩渕 洋子

法楽の延年の舞ひくり返し

『草笛』十二月号

太田 土男

涼風の声明となる平泉

平泉統ぶ千年の鐘涼し

『草笛』十二月号

森屋 慶基

清衡の意の満ち満つる初山河

「たばしね」一月号

鈴木 信

声荒びて「東北」「老松」謡初

「たばしね」一月号

佐々木邦世

空つばの空に芽吹きの大櫓

「たばしね」四月号

鈴木 信

しつとりと青水無月の中尊寺

「たばしね」七月号

岩渕眞理子

義家が陣場張山鳥渡る

「たばしね」九月号

北嶺 澄照

達谷の一袋の邑しぐれけり

「たばしね」十二月号

岩渕 洋子

高館に声かけ渡る冬の雁

「たばしね」十二月号

熊谷 初巳

鬼胡桃二つ蝦夷の面がまへ

毛越寺

延年の舞ひの鈴振る雪の底

太田 土男 句集『草泊り』より

平泉

青邨碑道のはじめの苔の花

東京を丸ごとたたく夕立かな

渡辺誠一郎 句集『赫赫』より

三月や何処へも引かぬ黄泉の泥

三・一一死者に添ひ伏す泥天使

チベット

銀漢を僧揺りあぐる読経かな

開け放ち海へ棚経聞かせをり

桜散る此の世彼の世を密にして

照井 翠 句集『泥天使』より

◇ 中尊寺に楸邨句碑の建立を發起してご承諾をお願いし

た折のこと。楸邨先生は「句碑というものを建てない、
そういうものを残さない」と、丁重に断られた。しかし、
どうしてもあきらめられなかった。

「義父に、わたしからも話してみましよう」と、応援
してくれたのが加藤瑠璃子さんでした。そして漸く、実
現できたのは二年後の、平成五年の十月。

俳誌『寒雷』選者、編集長と、現代俳句の発展に尽力
された瑠璃子さんが、去る十一月四日逝去されました。
あらためて感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(佐々木邦世)

〔関山歌籠〕

(令和二年四月)

〈第四十一回西行祭短歌大会〉

*今野 寿美選

横座には伯父が座りし母のさと囲炉裏に焼ける串刺しの鮫 (中尊寺貫首賞)

一 関 岩淵 初代

塩の塚一つ置きたるテーブルに新しき朝の光届きぬ (平泉町長賞)

一 関 斎藤のり子

献花すこしづつ殖えゆきていま大いなるかなしみの海 (平泉観光協会会長賞)

宮城県 大和 昭彦

さくらには桜の意地があるやうにかたくなに閉ざす小さき唇 (岩手日報社賞)

青森県 木立 徹

疑問符の首をたちまち感嘆符に変へる手品師チリフランミンゴ (IBC岩手放送賞)

北海道 鎌田 博文

さよならは最後の時までとっておく離れていても傍にいる人 (岩手日日新聞社賞)

群馬県 桑原 環世

佳作

日に一度真剣勝負の刻がある補聴器はずして歌詠むわれは 徳島県 小畑 定弘

夕映えにそと頭を下げた今日といふ再び出遇へぬ「時」に感謝す 静岡県 飯田ふみ代

夏風に青々と揺れし芭蕉の葉いまうらぶれて秋は深しも 東京都 高橋 正人

絞る糸解けば花びら放たるる藍染めスカーフ清水に晒す 宮城県 片山佐衣子

駅前のいつもの場所にいつも立つ托鉢僧なし(いつも)が失せる 東京都 森田小夜子

藍微塵金泥微塵のやどしたる弥陀のひかりやなほ濁らざる 盛岡 清水 亞彦



西行歌碑 (中尊寺参道「望古台」)

農耕馬軍馬となりて馬頭碑の並ぶ祠につばきの赤き 一 関 佐藤 峰子

父に似る声にて吾の読む本は母に習ひし「枕草子」 盛岡 藤井 永子

第四十一回大会は四月に開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から中止。応募句の中から選者に入選作品を決めていただきました。

一枚の写真から〈3〉



源義経公東下り行列

写真は五月三日の東下り行列のもの。義経公の北の方が牛車の中に。場所は峯薬師堂をすぎたあたり、大日堂の土手の方から撮影したようです。

右下をよく見ると、参道は未舗装です。うろ覚えですが、昭和四十年代後半には舗装されていたような気がします。およそ半世紀前の写真、土手と牛車の後方は人でいっぱいです。

私が小学生の頃、夜の七時のNHKニュース、全国の行楽地の賑わいを伝える中で、東下り行列の様子が放映されたことがあります。「全国ニュースになるくらいすごいお祭りなんだなあ」と感心したことを覚えています。

御神事能番組

令和二年春の御神事能は中止、能舞台上で御法楽のみ執行

秋の藤原まつり中尊寺能 十一月三日

能 猩

シテ 佐々木五大
ワキ 佐々木秀厚

太鼓 三浦 章興
大鼓 千葉 快俊
小鼓 菅原 光聡
笛 清水 秀法



能「猩々」(令和2年11月3日)

光勝院本尊造立結縁浄財寄進 御芳名

東京都	中尊寺前貫首	山田俊和様	五百万円	神奈川県	大聖院様	十万円
仙台市	光禪寺様		五十万円	神奈川県	大宝寺様	十万円
石巻市	東雲寺様		五十万円	福島県	高松山観音寺様	十万円
滋賀県	明王院様		五十万円	二戸市	天台寺様	十万円
東京都	最勝寺様		三十万円	平泉町	白山神社様	十万円
平泉町	満福寺様		三十万円	滋賀県	法曼院様	十万円
東京都	富岡八幡宮様		二十万円	東京都	龍眼寺様	十万円
平泉町	達谷西光寺様		十三万円	東京都	成就寺様	八万円
東京都	圓通寺様		十万円	福島県	阿弥陀寺様	五万円
登米市	興福寺様		十万円	花巻市	自性院様	五万円
浦谷町	篁峯寺様		十万円	平泉町	自性院様	五万円
京都府	三千院様		十万円	京都府	実光院様	五万円
東京都	正法院様		十万円	山形県	性相院様	五万円
松島町	瑞巖寺様		十万円	名取市	大聖寺様	五万円
東京都	善養寺様		十万円	名取市	藤田寺様	五万円
				群馬県	普門寺様	五万円
				女川町	永清寺様	三万円

東京都	円乗院様		三万円	奈良県	元興寺様	一万円
滋賀県	延命院様		三万円	一関市	観福寺様	一万円
栃木県	観音寺様		三万円	加美町	西光寺様	一万円
埼玉県	吉祥寺様		三万円	埼玉県	十連寺様	一万円
平泉町	金龍山見性寺様		三万円	平泉町	寿徳院様	一万円
奥州市	黒石寺様		三万円	栃木県	照尊院様	一万円
長野県	国分寺様		三万円	岡山県	浄土寺様	一万円
紫波町	五郎沼薬師神社様		三万円	群馬県	西光寺様	一万円
滋賀県	金剛輪寺様		三万円	秋田県	蔵光院様	一万円
東京都	自性院様		三万円	静岡県	智満寺様	一万円
滋賀県	寂光院様		三万円	東京都	如意輪寺様	一万円
東京都	清水寺様		三万円	東京都	寶泉寺様	一万円
東京都	長命寺様		三万円	奥州市	法泉寺様	一万円
群馬県	遍照寺様		三万円	神奈川県	宝塔寺様	一万円
弘前市	報恩寺様		三万円	仙台市	満願寺様	一万円
千葉県	宝林寺様		三万円	平泉町	薬王院様	一万円
群馬県	正円寺様		二万円	弘前市	薬王院様	一万円
栃木県	宝蓮寺様		二万円	栃木県	龍蔵寺様	一万円
栗原市	奥福寺様		一万円	兵庫県	龍蔵寺様	一万円

一関市	一関信用金庫様	三百万円	一関市	(有)すがゆう生花店様	十万円
平泉町	川嶋印刷(株)様	三百万円	一関市	(有)セロン岩手様	十万円
平泉町	(株)平泉観光レストセンター様	三百万円	仙台市	(株)空地音ハーモニー様	十万円
平泉町	朝田建設(株)様	百万円	平泉町	(有)平泉観光写真社様	十万円
一関市	(株)精茶百年本舗様	百万円	盛岡市	平泉研究会 駒草の広場様	十万円
一関市	(有)豊隆軌道様	五十万円	平泉町	(株)平泉ホテル武蔵坊様	十万円
東京都	小岩金網(株)様	三十万円	平泉町	(株)北都高速運輸倉庫東北様	十万円
平泉町	平泉町観光ガイド事務所様	三十万円	矢巾町	みちのくコカ・コーラボトリング(株)様	十万円
一関市	両磐酒造(株)様	三十万円	平泉町	朝田茂子様	十万円
東京都	鈴木友子様	三十万円	神奈川県	遠藤東子様	十万円
愛知県	茶谷和夫様	三十万円	奥州市	小野寺誠様	十万円
一関市	(有)あべちう様	二十万円	奥州市	海鉾 守様	十万円
千葉県	海老原廣伸様	二十万円	神奈川県	小西暲也様	十万円
福井県	中林春夫様	二十万円	平泉町	佐々木典義様	十万円
東京都	山田泰枝様	二十万円	一関市	佐藤威代様	十万円
一関市	宇部建設(株)様	十万円	石巻市	鈴木公彦様	十万円
平泉町	駅前芭蕉館様	十万円	平泉町	関口一雄様	十万円
東京都	貝作様	十万円	平泉町	千葉喜一様	十万円
一関市	山王山温泉 瑞泉郷様	十万円	平泉町	千葉敏明様	十万円

奥州市	江刺開発振興(株)様	五万円	一関市	大森忠雄様	五万円
平泉町	葛西石材店様	五万円	群馬県	小此木輝之様	五万円
平泉町	(有)小岩材木店様	五万円	平泉町	小野寺逸平様	五万円
平泉町	工房和秋様	五万円	北上市	菊池國雄様	五万円
平泉町	一般社団法人古都ひらいずみガイドの会様	五万円	神奈川県	佐藤芙蓉様	五万円
一関市	コンカツ印刷(有)様	五万円	平泉町	関口恵智子様	五万円
一関市	(株)佐々木製菓様	五万円	平泉町	千葉和男様	五万円
北上市	一般社団法人茶道裏千家淡交会岩手南支部様	五万円	平泉町	千葉庄悦様	五万円
一関市	(株)佐原様	五万円	大阪府	辻林正博様	五万円
平泉町	(有)千葉恵製菓様	五万円	京都府	坪田最有様	五万円
平泉町	(有)銅盛鋳金工業様	五万円	千葉県	細野舜海様	五万円
平泉町	どぶろっく様	五万円	千葉県	町田義昭様	五万円
盛岡市	(株)トヨタレンタリース岩手様	五万円	一関市	松川 誠様	五万円
花巻市	花巻温泉(株)様	五万円	一関市	八重樫貞子様	五万円
盛岡市	東日本旅客鉄道(株)様	五万円	一関市	梁川 浩様	五万円
平泉町	(有)平泉電力工業所様	五万円	一関市	山田 雪様	五万円
奥州市	(有)前沢実業様	五万円	盛岡市	(株)IBC岩手放送様	三万円
仙台市	松井建設(株)東北支店様	五万円	平泉町	(株)衣関屋様	三万円
平泉町	泉 信平様	五万円	盛岡市	(株)岩手日報社様	三万円

平泉町	及川木工所様	三万円	平泉町	岩渕洋子様	三万円
東京都	(株)ザ・サードアイ・コーポレーション様	三万円	平泉町	岩間智子様	三万円
平泉町	(株)浄土の郷平泉様	三万円	埼玉県	内海栄子様	三万円
平泉町	(株)鈴中様	三万円	平泉町	葛西 博様	三万円
平泉町	泉橋庵様	三万円	東京都	亀井俊一様	三万円
雫石町	槻沢芸能保存会様	三万円	奥州市	菊地 栄様	三万円
盛岡市	盛岡喜桜会様	三万円	盛岡市	工藤暉子様	三万円
京都府	森忠法衣店様	三万円	東京都	近藤静乃様	三万円
平泉町	やお清様	三万円	東京都	佐々木多門様	三万円
平泉町	焼肉高梁様	三万円	盛岡市	佐々木宗生様	三万円
一関市	炉ばた一八様	三万円	一関市	佐藤育郎様	三万円
平泉町	青木幸保様	三万円	平泉町	佐藤孝悟様	三万円
平泉町	旭 源治様	三万円	奥州市	佐藤善行様	三万円
平泉町	阿部真郎様	三万円	仙台市	佐藤 元様	三万円
東京都	有賀祥隆様	三万円	一関市	七田芳弘様	三万円
盛岡市	安藤 厚様	三万円	平泉町	菅原弘明様	三万円
千葉県	石毛裕之様	三万円	平泉町	鈴木四郎様	三万円
平泉町	伊藤新一様	三万円	東京都	高橋富雄様	三万円
一関市	岩渕賢吾様	三万円	奥州市	千田良憲様	三万円

平泉町	千葉慶一様	三万円	東京都	亀井忠雄様	二万円
平泉町	千葉謙吉様	三万円	平泉町	小松代ミキコ様	二万円
平泉町	千葉文夫様	三万円	平泉町	佐々木慶子様	二万円
平泉町	千葉雄治様	三万円	平泉町	佐々木秀一様	二万円
東京都	中村英信様	三万円	平泉町	佐々木徳円様	二万円
盛岡市	野口芳子様	三万円	一関市	菅原計二様	二万円
新潟県	松原晴樹様	三万円	平泉町	菅原信行様	二万円
平泉町	南館彰礼様	三万円	平泉町	菅原 寿様	二万円
東京都	渡邊浩子様	三万円	奥州市	菅原睦子様	二万円
台湾	釋 通和様	三万円	東京都	助川 治様	二万円
一関市	一関俳句協会様	二万円	一関市	鈴木英一様	二万円
奥州市	(株)回進堂様	二万円	平泉町	鈴木のり子様	二万円
多賀城市	小熊座俳句会様	二万円	平泉町	千葉栄喜様	二万円
平泉町	(有)三栄ビジネス様	二万円	東京都	千葉勝也様	二万円
盛岡市	(株)三衡設計舎様	二万円	平泉町	千葉敬道様	二万円
兵庫県	稲森善彦様	二万円	平泉町	鳥畑 裕様	二万円
平泉町	岩渕光三郎様	二万円	栃木県	長島時子様	二万円
一関市	太田耕二様	二万円	山形県	中野真理子様	二万円
滝沢市	神山安生様	二万円	仙台市	七海雅人様	二万円

一関市	嶋山篤雄様	二万円	平泉町	こがさか楓林堂様	一万円
奥州市	藤波公之様	二万円	塩竈市	塩竈神楽保存会様	一万円
東京都	藤原淑子様	二万円	平泉町	体験Cafe+WA様	一万円
奥州市	前田満子様	二万円	平泉町	(有)タイヤギャラリー車遊館様	一万円
平泉町	山平省一様	二万円	宮古市	津軽石さんさ踊り保存会様	一万円
平泉町	六角忠義様	二万円	北上市	(株)テレビ岩手県南支社様	一万円
平泉町	六角忠義様	二万円	平泉町	長島郵便局様	一万円
一関市	(株)イーハトーブ東北様	一万円	一関市	東日本旅客鉄道(株)盛岡支社一ノ関駅様	一万円
一関市	一関警察署睦会様	一万円	平泉町	平泉メビウスの会様	一万円
一関市	(株)一関ケーブルネットワーク様	一万円	平泉町	平泉郵便局様	一万円
一関市	一関書道用品センター様	一万円	東京都	三義産業(株)様	一万円
岐阜県	いづ美會様	一万円	奈良県	山本工務店様	一万円
盛岡市	(株)岩手めんこいテレビ様	一万円	一関市	青柳清隆様	一万円
普代村	鵜鳥神楽保存会様	一万円	盛岡市	朝田泰子様	一万円
盛岡市	(株)エフエム岩手様	一万円	一関市	阿部郁子様	一万円
平泉町	(有)翁知屋様	一万円	一関市	阿部幸男様	一万円
奥州市	小田代神楽保存会様	一万円	平泉町	阿部容子様	一万円
盛岡市	(株)川徳様	一万円	平泉町	阿部義美様	一万円
気仙沼市	一般社団法人気仙沼観光コンベンション協会様	一万円	千葉県	栗屋征五様	一万円

京都府	池内 了様	一万円	東京都	内田輝幸様	一万円
平泉町	石神 忠様	一万円	東京都	内田紀元様	一万円
平泉町	石神 登様	一万円	東京都	内田道元様	一万円
盛岡市	石川 誠様	一万円	東京都	内田美由紀様	一万円
一関市	石川 靖様	一万円	東京都	内田瑠璃子様	一万円
千葉県	一薰千代子様	一万円	奥州市	梅森サ夕様	一万円
東京都	一噌隆之様	一万円	平泉町	及川一男様	一万円
仙台市	伊藤信子様	一万円	八幡平市	及川和雄様	一万円
奥州市	伊藤弘美様	一万円	一関市	及川 保様	一万円
奥州市	伊藤博幸様	一万円	一関市	及川次男様	一万円
一関市	岩淵一彦様	一万円	奥州市	及川秀夫様	一万円
一関市	岩淵克英様	一万円	平泉町	及川美知子様	一万円
平泉町	岩淵克美様	一万円	一関市	及川行雄様	一万円
平泉町	岩淵清彦様	一万円	奥州市	及川由紀子様	一万円
平泉町	岩淵孝二様	一万円	滝沢市	大石和夫様	一万円
平泉町	岩淵毅志様	一万円	東京都	大隅和雄様	一万円
平泉町	岩淵照美様	一万円	一関市	小笠原隆様	一万円
平泉町	岩淵三枝子様	一万円	一関市	小野寺和恵様	一万円
平泉町	岩淵優子様	一万円	奥州市	小野寺宗市様	一万円

平泉町	小野寺孝也様	一万円	一関市	加藤邦英様	一万円
平泉町	小野寺 公様	一万円	一関市	加藤美奈様	一万円
平泉町	小野寺常守様	一万円	盛岡市	金澤礼子様	一万円
平泉町	小野寺春子様	一万円	栗原市	狩野秋義様	一万円
平泉町	小野寺マツ子様	一万円	平泉町	川坂繁美様	一万円
一関市	小野寺恵実様	一万円	平泉町	川坂ヨシ子様	一万円
奥州市	小野寺 康様	一万円	平泉町	川崎 寛様	一万円
千葉県	小野寺洋子様	一万円	奥州市	川端利郎様	一万円
平泉町	小野寺義男様	一万円	盛岡市	菅野 彊様	一万円
平泉町	小野寺隆四郎様	一万円	埼玉県	菅野美代子様	一万円
一関市	小野寺隆三様	一万円	花巻市	菊池秋光様	一万円
一関市	小野寺 荅様	一万円	仙台市	菊池勇夫様	一万円
平泉町	小山哲子様	一万円	釜石市	菊地公明様	一万円
仙台市	蠣崎美智様	一万円	盛岡市	菊池 尚様	一万円
平泉町	葛西 享様	一万円	奥州市	菊地永久子様	一万円
平泉町	葛西直助様	一万円	一関市	菊地美帆様	一万円
平泉町	葛西光男様	一万円	一関市	亀卦川永子様	一万円
平泉町	葛西良治様	一万円	盛岡市	北田玲子様	一万円
平泉町	片平 俊様	一万円	一関市	吉家聡美様	一万円

奥州市	木村文子様	一万円	一関市	佐々木美佳様	一万円
一関市	熊谷英一様	一万円	奥州市	佐々木美代子様	一万円
奥州市	熊谷典子様	一万円	一関市	佐々木安子様	一万円
埼玉県	小林紘子様	一万円	平泉町	佐々木雄一様	一万円
平泉町	小松代智様	一万円	平泉町	佐々木良久様	一万円
神奈川県	古宮直英様	一万円	奥州市	佐々木梨沙様	一万円
東京都	近藤誠一様	一万円	栗原市	佐藤あや様	一万円
一関市	齋藤公恵様	一万円	茨城県	佐藤栄一様	一万円
奥州市	齋藤重樹様	一万円	奥州市	佐藤喜一様	一万円
千葉県	斉藤福次郎様	一万円	一関市	佐藤修子様	一万円
秋田県	佐越良子様	一万円	平泉町	佐藤 正様	一万円
盛岡市	佐近裕之様	一万円	奥州市	佐藤常夫様	一万円
奥州市	佐々木一吉様	一万円	一関市	佐藤冬扇様	一万円
平泉町	佐々木吉郎様	一万円	一関市	佐藤トモ子様	一万円
一関市	佐々木孝夫様	一万円	盛岡市	佐藤成子様	一万円
平泉町	佐々木秀子様	一万円	千葉県	佐藤典子様	一万円
奥州市	佐々木祐至様	一万円	平泉町	佐藤秀昭様	一万円
平泉町	佐々木正治様	一万円	奥州市	佐藤文夫様	一万円
奥州市	佐々木美榮子様	一万円	奥州市	佐藤正子様	一万円

奥州市	佐藤正人様	一万円	平泉町	菅原雄策様	一万円
平泉町	佐藤由美子様	一万円	一関市	菅原由香様	一万円
一関市	佐藤善仁様	一万円	盛岡市	杉本 顕様	一万円
奥州市	佐藤義美様	一万円	平泉町	鈴木多佳子様	一万円
平泉町	佐藤力雄様	一万円	奥州市	鈴木千賀子様	一万円
奥州市	佐藤良一様	一万円	一関市	鈴木千春様	一万円
平泉町	神野富江様	一万円	奥州市	鈴木春喜様	一万円
平泉町	菅原勇雄様	一万円	平泉町	鈴木 信様	一万円
平泉町	菅原悦朗様	一万円	平泉町	鈴木正人様	一万円
東京都	菅原公雄様	一万円	奥州市	鈴木まゆみ様	一万円
平泉町	菅原清人様	一万円	奥州市	鈴木まり子様	一万円
一関市	菅原キワ子様	一万円	平泉町	鈴木睦子様	一万円
金ヶ崎町	菅原啓一様	一万円	一関市	鈴木陽子様	一万円
平泉町	菅原幸佐様	一万円	平泉町	鈴木義孝様	一万円
一関市	菅原庄一様	一万円	奥州市	鈴木ヨリ子様	一万円
平泉町	菅原俊美様	一万円	奥州市	須田信子様	一万円
平泉町	菅原幹成様	一万円	仙台市	高田昌行様	一万円
奥州市	菅原実穂代様	一万円	平泉町	高橋昱子様	一万円
平泉町	菅原 泰様	一万円	一関市	高橋邦夫様	一万円

奥州市	高橋新一様	一万円	平泉町	千葉公子様	一万円
平泉町	高橋妙子様	一万円	平泉町	千葉健治様	一万円
一関市	高橋トキ子様	一万円	一関市	千葉早苗様	一万円
奥州市	高橋はるみ様	一万円	一関市	千葉志津枝様	一万円
平泉町	高橋英子様	一万円	奥州市	千葉俊一様	一万円
平泉町	高橋三男様	一万円	平泉町	千葉武一様	一万円
平泉町	瀧澤幸子様	一万円	平泉町	千葉夕ケ子様	一万円
平泉町	瀧澤テル子様	一万円	平泉町	千葉武義様	一万円
東京都	只野順元様	一万円	奥州市	千葉照男様	一万円
大阪府	谷崎祐子様	一万円	一関市	千葉 徹様	一万円
北上市	田村朋子様	一万円	平泉町	千葉智春様	一万円
平泉町	千葉イク様	一万円	平泉町	千葉信夫様	一万円
東京都	千葉一郎様	一万円	一関市	千葉春香様	一万円
奥州市	千葉 薫様	一万円	平泉町	千葉 均様	一万円
平泉町	千葉和夫様	一万円	平泉町	千葉マサ様	一万円
神奈川県	千葉勝昭様	一万円	平泉町	千葉正佳様	一万円
滝沢市	千葉カツ子様	一万円	一関市	千葉容宏様	一万円
奥州市	千葉勝子様	一万円	一関市	天童美喜夫様	一万円
奥州市	千葉勝弘様	一万円	平泉町	鳥畑 登様	一万円

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

令和元年十二月一日～令和二年十一月三十日

□ 役職任免

(令和二年四月一日)

天台宗研究センター研究員

眞珠院(副)

菅野 澄円

(令和二年五月一日)

天台宗国際平和宗教協力協会専門委員

金剛院(副)

破石 晋照

(令和二年七月三日)

祖師先徳鑽仰大法会事務局顧問

中尊寺

奥山 元照

□ 住職任命

(令和二年四月一日)

寶性院兼務住職

菅野 康純

(令和二年七月三日)

中尊寺住職

奥山 元照

金色院兼務住職

奥山 元照

□ 褒章

(令和二年十月二十七日)

一宗公職歴任表彰 眞珠院(副)

菅野 澄円

□ 教師補任

(令和二年四月二十一日)

僧正

瑠璃光院

菅野 康純



天台宗一隅を照らす運動
公式キャラクター

「しょうごうさん」

御奉納者 御芳名

令和元年十二月～令和二年十一月

一 根来折敷 大十客、小十客

神奈川県 小西暲也様

光勝院調度品

一 秀衡塗 盛皿 柏文 一枚

平泉町 (有)翁知屋様

一 南部鉄瓶 柚子型アラレ 一口

奥州市 佐秋鑄造所様

一 飾り和太鼓 一張

一関市 小山太鼓店様

一 蓮染め金色布 一枚

一関市 (株)京屋染物店様

浄財御奉納者 御芳名

令和元年十二月～令和二年十一月

一 関信用金庫 平泉支店様

三万円

(株)えさしわいわいネット 菊池正仁様

三万円

海鋒 守様

五万円

金色の風栽培研究会様

十万円

(有)平泉観光写真社様

十万円

立正佼成会 花巻教会様

三万円

立正佼成会 盛岡教会様

三万円

西福寺様

一 一五万円

安田悦郎様

二十万円

佐々木宗生様・佐々木多門様

二十万円

大正大学様

三万円

(株)大林組 東北支店長 和國信行様

十万円

最勝寺様

十五万円

(有)千葉恵製菓 代表取締役 千葉正利様

十万円

西福寺 世話人会様

十万円

(株)長谷川製作所様

五万円

浄土宗 岩手教区教務所様

五万円

押田旭蓉様

三万円

千葉高代様・土方豊子様

五万円

天台寺様

三万円

一関信用金庫 理事長 千葉一郎様

三万円

(順不同)

赤堂稲荷鳥居建立寄進 御芳名

令和元年十二月～令和二年十一月

平泉町 (尙)岩手南警備保障様 一基

不動尊篤信御奉納者 御芳名

令和元年十二月～令和二年十一月

青森市	佐々木幸子様	二十九万円	仙台市	(株)橋場総設 泉 笑子様	三万円
中野区	中村武司様	十四万五千円	平泉町	一関信用金庫平泉支店様	三万円
金ヶ崎町	(株)板宮建設代表取締役 板宮一善様	十三万円	一関市	及川元一様	三万円
知立市	吉川昌作様	十万円	仙北市	熊谷 剛様	三万円
一関市	(尙)豊隆軌道 千葉美樹様	六万円	奥州市	佐藤弥美様	三万円
平泉町	(株)北都高速運輸倉庫東北 小野寺勝彦様	五万五千円	一関市	山平様	三万円
秋田市	木村英夫様	四万円	一関市	割烹炉ばた一八 渋谷正幸様	三万円
一関市	沼倉研一様	四万円	いわき市	盛喜石油(株)代表取締役 鈴木良一様	三万円
千葉市	渡邊良弘様	四万円	和泉市	辻林正博様	三万円
一関市	小野寺清一様	三万五千円	一関市	(株)東北鉄興社様	三万円
登米市	和田一眞様	三万五千円	一関市	東北建工企業(株) 今野幸宏様	三万円
一関市	(株)アーク様	三万円	平泉町	(株)フタバ平泉様	三万円
銚子市	(株)イクオリティー 石毛裕之様	三万円	宮城県 南三陸町	山口 昇様	三万円
			一関市	(株)精茶百年本舗様	三万円
			青森県 南部町	工銀青果市場 工藤一男様	三万円
			黒石市	(尙)池田不動産 池田陸奥男様	季毎御供物
			新潟市	松原晴樹様	季毎御供物
			水戸市	つくし 藤枝恵枝子様	季毎御供物
			二戸市	(尙)岩食商事 米沢 励様	季毎御供物

黒石市	池田地建 池田裕章様	季毎御供物	平泉町	(尙)銅盛鋳金工業 鈴木繁夫様	季毎御供物
弘前市	笹 哲子様	季毎御供物	小樽市	村口初男様	季毎御供物
さいたま市	細淵ます美様	季毎御供物	富良野市	野村農園 野村 隆様	季毎御供物
一関市	(尙)酒井瓦工業様	季毎御供物	北上市	玉井寛徳様	季毎御供物
奥州市	小野智眞子様	季毎御供物	高崎市	大門屋物産(株) 金色ダルマ(特大)二体	(順不同)
五所原市	坂本秀美様	季毎御供物			
大館市	北秋生コン(株) 加賀谷正子様	季毎御供物			
大仙市	(尙)ベル美容室 高橋紀美世様	季毎御供物			
弘前市	鎌田照美様	季毎御供物			
青森市	唐牛正治様	季毎御供物			
平川市	長尾智子様	季毎御供物			
大崎市	櫻井みゆき様	季毎御供物			
金ヶ崎町	有住安美様	季毎御供物			
二戸市	沢田かつえ様	季毎御供物			
富谷市	小笹佳智様	季毎御供物			
平泉町	千葉時胤様	季毎御供物			
平泉町	(尙)平泉観光写真社 高橋拓生様	季毎御供物			
平泉町	岩間智子様	季毎御供物			
平泉町	鈴木正人様	季毎御供物			

第六十回 平泉芭蕉祭全国俳句大会

令和三年六月二十九日(火)

会場 中尊寺光勝院

特別選者・講師

長谷川 權 先生

(「古志」前主宰／朝日俳壇選者)

執務日誌抄

令和元年十二月一日（令和二年十一月三十日）

令和元年

◇十二月

- 一日 月次大般若（本堂）
- 二日 平泉町文化財調査委員会（管財章興 於平泉文化遺産センター）
- 三日 平泉の文化遺産ガイドンス施設（仮称）新築工事安全祈願法要（金剛院、五大、亮王）
- 平泉観光意見交換（執事長、総務澄円 於役場）
- 六日 気仙沼観光コンベンション協会会長加藤宣夫氏、事務局長白井亮氏来山（執事長案内）

- 十日 寒修行（行者三名、町内托鉢。寒の入りく節分）
- 十一日 修正会 白山十二面供（本堂）
- 十二日 修正会 大般若会（本堂）
- 十三日 修正会 弥陀供（金色堂）
- 十四日 修正会 藥師供（讚衡蔵）
- 十五日 一字金輪仏・千手観音法楽
- 十六日 修正会 結願

- 七日 藥師会（讚衡蔵）
- 十日 JA泉産米「金色の風」奉納式（本堂）
- 十一日 初詣警備会議（管財 於泉橋庵）
- 十二日 前天台宗ハワイ別院住職荒了周師葬儀（十六日、山田俊和貫首 於ハワイ）
- 十三日 中尊寺節分講中総会（執事長、法務 於泉橋庵）
- 十四日 金色堂調査（十五日、室瀬和美委員、東京文化財研究所、文化庁ほか）
- 十五日 弥陀会（讚衡蔵）
- 平泉町交通指導隊五十周年記念式典（参拝秀厚 於武蔵坊）
- 十六日 骨寺村莊園米奉納
- お経を読む会（真珠ノ澄円）
- 観光庁審議官加藤進氏ほか来山（執事長案内 本堂・金色堂）
- 平泉町における「文化遺産を活用した観光による地域活性化」に関する連携協定

- 十三日 午後二時半 恒例「金盃抜き」立正俊成会盛岡教会様・花巻教会様来山（山田貫首）
- 十四日 慈覚会 御影供 本堂
- お経を読む会（山田貫首）
- 十五日 天台宗海外伝道事業団役員会（山田貫首 於上野両大師）
- 一山勉強会「ブランドイング」(講師 高橋邦忠氏)
- 前天台宗ハワイ別院住職荒了周師本葬儀（二十四日、山田貫首、随行晋照 於ハワイ）
- 富岡八幡宮宮司様ほか来山（執事長）
- 二十六日 文化財防火訓練
- 二十八日 ジャパンエキスポ・タイランド 出向（二月一日、総務晋照）
- 二十九日 平泉観光協会理事会（執事長）
- ◇二月
- 一日 月次大般若（本堂）
- 二日 恒例大節分会（関取北勝富士園

令和二年

◇一月

- 一日 〇時 新年祈禱護摩供修行 七時半 東山町（若水送り）着 九時半 正月祈禱護摩（本堂）



招く。歳男歳女九十九名、町内園児が豆を撒く

- 三日 節分会（日数心経 本堂）
- 四日 平泉岩銀友の会新春講演会（総務澄円 於武蔵坊）
- 五日 一隅を照らす運動理事会（山田貫首 於天台宗務庁）
- 七日 輪王寺門跡神田秀順大僧正本葬儀（山田貫首、執事長、随行秀法 於寛永寺輪王殿）
- 十一日 岩手県文化財愛護協会創立

- 五十周年記念式典(管財章興 於ホテルメトロポリタン盛岡 ニューウイング)
- 十二日 天台宗海外伝道事業団役員会(山田貫首 於上野両大師)
- 十四日 光勝院建設委員会 涅槃会御建夜(本堂)
- 十五日 涅槃会(本堂) お経を読む会(釈尊院)
- 十八日 「能と土岐善麿 秀衡を観る」(邦世、澄元、澄照、秀厚、晋照、五六、亮王 於喜多六平太記念能楽堂)
- 二十二日 気仙沼市本吉冠者「高衡会」総会(執事長 於サンマリン気仙沼ホテル観洋)
- 二十三日 金色堂修理委員会(二十四日、光勝院)
- 二十七日 平泉観光協会通常総会(執事長 於平泉商工会館)
- 二十九日 山内金剛院副任職結婚式(本堂)

- ◇三月
- 一日 月次大般若(本堂)
 - 三日 平泉町文化財調査委員会管財章興 於平泉文化遺産センター)
 - 十一日 東日本大震災慰霊法要(山田貫首、秀厚、秀法 於陸前高田市小友地藏尊)
 - 大震災物故者追善回向祥月命日法要(本堂) 午後二時四十六分 発生時刻 打鐘・黙祷
 - 十二日 平泉町世界遺産推進基金運営委員会(執事長 於平泉文化遺産センター)
 - 十四日 大館錦神社訪問(貫首、随行晋照)
 - 十六日 平泉観光協会理事会(執事長) 藤原まつり協議会(執事長)
 - 十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂) 平泉町観光審議会(執事長 於役場)
 - 平泉文化観光振興基金運営

- ◇四月
- 一日 月次大般若(本堂)
 - 三日 ウェーサカ仏教会総会(法務宏紹 於一関松竹)
 - 四日 御修法「七佛薬師大法」
 - 委員会 執事長 於役場)
 - 二十日 春彼岸会法要(法華三昧 本堂)
 - 二十一日 源義経公東下り行列保存会 定期総会(総務澄円 於滝沢魚店)
 - 二十四日 開山会(護摩供 開山堂)
 - 春期定例一山会議
 - 二十五日 中尊寺菊まつり協賛会役員会(光勝院広間)
 - 二十七日 金色堂修理手板検分(執事長、管財章興 於東博)
 - 中尊寺新能の会役員会(総務澄円 於観光協会)
 - 三十日 東稲山さくらの会幹事会(管財章興 於役場)
 - 平泉古事の森育成協議会(管財章興 於役場)

- 八日 仏生会(本堂)
- 九日 東稲山さくらの会総会(管財章興 於役場)
- 町感染症対策会議(執事長)
- 十一日 金色堂・讚衡蔵拝観停止
- 十六日 新型感染症早期終息・病魔退散祈願法要(本堂)
- 十九日 光勝院落慶法要
- 二十日 町感染症対策会議(執事長) 中尊寺新能の会役員会(於役場)
- 二十四日 西行法師追善法要(本堂)
- 三十日 中尊寺貫首山田俊和大僧正退任
- 町感染症対策会議(執事長)

- ◇五月
- 一日 藤原四代公追善法要(本堂)
 - 二日 開山護摩供(開山堂)
 - 四日 白山社祭礼御法楽(能舞台)
 - 六日 山王講(本堂)
 - 十三日 平泉観光協会臨時理事会(執事長)
 - 十五日 町感染症対策会議(執事長)
 - 二十一日 町感染症対策会議(執事長)
 - 二十四日 光勝院建設委員会
 - 二十五日 臨時一山会議
 - 町感染症対策会議(執事長)
 - 二十九日 平泉観光推進実行委員会総会(執事長 於役場)
- ◇六月
- 一日 金色堂・讚衡蔵拝観再開 月次大般若(本堂)
 - 四日 伝教会(御影供 本堂)
 - 八日 町感染症対策会議(執事長)
 - 十一日 金色堂修理委員会(光勝院)
 - 十三日 四寺廻廊法要(光勝院)

- ◇七月
- 一日 月次大般若(本堂)
 - 三日 中尊寺中興第二十九世貫首に(埼玉県川越市西福寺住職)奥山元照僧正就任
 - 六日 讚衡蔵運営委員会 お経を読む会(甕璃光院)
 - 十二日 平泉観光協会理事会(執事長)
 - 十五日 奥山元照新貫首仮入山法要(本堂)
 - 十七日 清衡公御月忌(胎曼供 本堂)
 - 二十八日 町感染症対策会議(執事長) 平泉町文化財調査委員会(管財章興 於平泉文化遺産センター)
 - 三十日 金色堂修理委員会(光勝院)



千手観音菩薩立像（重要文化財）

檜材の一木造りで、両手を頭上で天に向けて組み、掌に化仏をいただいている。この姿の千手観音像は清水式といわれ、全国的にも遺例は少なく貴重である。すくくと立つ等身大（174.2cm）の美しい像で、平安時代（12世紀）の作とされる。

金色堂調査（三十日、室瀬和美委員）

◇八月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 四日 午後三時半 〈平和の鐘〉打鐘
- 六日 平泉大文字送り火警備会議 (管財五大 於役場)
- 七日 夏堂籠り（十一日、結衆、開山堂）
- 十六日 第五十六回平泉大文字送り火
- 二十三日 施餓鬼会御逮夜(本堂)
- 二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)
- 二十五日 平泉町上下水道事業運営協議会(管財五大 於役場)
- 二十六日 平泉をきれいにする会(管財五大 於役場)
- 二十七日 光勝院建設委員会
- 清衡公の願い そして先人たちの言葉
- ―千葉方彩・土方香茗二人展―（九月二日、本堂）

◇九月

- 一日 月次大般若(本堂)
 - 三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂)
 - 十六日 御居間建築工事安全祈願法要(真珠院、執事長ほか)
 - 十七日 白符忌(本堂)
 - 十九日 光勝院建設委員会
 - 赤堂稻荷例祭(護摩供)
 - 二十二日 秋彼岸会法要(常行三昧 本堂)
 - お経を読む会(地藏ノ秀厚)
 - 二十三日 金色堂調査（二十六日、室瀬和美委員、岡田文男委員、東文研文化庁）
 - 小西美術工芸社社長来山 (執事長)
 - 二十八日 平泉観光協会理事会(執事長)
- ◇十月
- 一日 月次大般若(本堂)
 - 二日 慈眼会(本堂)
 - 大晦日感染症対策意見交換 (総務澄円 於役場)

四日 中尊寺通りホコ天まつり開

- 会式(参拜秀厚 於中尊寺通り)
 - 五日 中尊寺菊まつり協賛会役員会・実行委員会(光勝院)
 - 十八日 お経を読む会(葉樹王院)
 - 二十日 菊まつり開關法要
 - 二十二日 住職任命辞令親授式(貫首、随行澄円 於宗務庁議場)
 - 二十八日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)
 - 三十日 紅葉銀河(参道の紅葉を照らす 十一月十五日)
 - 三十二日 チェロ新倉瞳氏&アコーデオンの佐藤芳明氏奉納演奏(金色堂旧覆堂)
- ◇十一月
- 一日 秋の藤原まつり開幕
 - 藤原四代公追善法要
 - 稚児行列
 - 郷土芸能奉演(平泉 達谷窟毘沙門神楽)
 - 二日 お経を読む会(天徳院)

- 三日 郷土芸能奉演(粟原 栗原神楽)
- 中尊寺能「猩々」
- 郷土芸能奉演(衣川 川西念佛剣舞)
- 五日 国宝「中尊寺金色堂保存修理工事」現地確認(文化庁)
- 金色堂保存修理現地説明会
- 六日 世界遺産登録十周年記念事

- 七日 業幹事会(総務澄円 於役場)
- 仏教文化研究所研修「経塚を訪ねる」(講師 八重樫忠郎氏)
- 十日 写経奉納式(本堂)
- 十三日 唐招提寺様来山(貫首案内)
- 十五日 菊まつり表彰式(光勝院)
- 二十三日 天台会御逮夜(本堂)
- 二十四日 天台会(御影供 本堂)

- 二十五日 秋期定例一山会議
- 陸前高田市小友地藏尊参拝 (貫首、執事長、金剛院、随行秀法)
- 十二月十五日、国宝「中尊寺金色堂保存修理」工事竣工法要が執り行われた。



金色堂保存施設（新覆堂）改修工事前



改修工事後

金色堂のガラススクリーン

金色堂は、昭和三十七年（一九六二）四十三年（一九六八）に行われた「昭和の大修理」により創建当時の姿をよみがえらせました。上の写真のようにガラススクリーンには金属製の枠がありました。

昭和六十一年（一九八六）〜平成元年（一九八九）に金色堂保存施設（新覆堂）改修工事が、次の方針で実施されました。

- ・新覆堂の断熱性を向上させる。
- ・防湿性を向上させる。
- ・ガラススクリーン内部の空気状態を安定させるためガラススクリーンを拡張移設し、新材料で作成する。

改修により、枠がなくなり、すっきりとした姿となったのでした。

ご祈祷・ご回向のご案内

□ 当山祈祷道場不動堂にて祈祷勤修いたします。不動明王御宝前にてご祈祷後、お札とお供物をお授けします。志納金は一願五千円よりお申し込みいただけます。

例 厄除開運 家内安全 當病平癒 商売繁昌 良縁成就
交通安全 学業成就 身体健全 受験合格 心願成就 等

□ 本堂ご本尊丈六釈迦如来御宝前におきまして先祖供養、水子供養、東日本大震災物故者供養を勤修いたします。ご供養の証として「追善殖福証」をお渡し（不要の方は当山にて奉納）いたします。志納金は一件三千円より。

例 ○○家先祖代々供養 ○○○居士（大姉）供養
○○家水子供養 東日本大震災物故者供養 等

※ご来山申込みが難しい方は、ファックス等でもお申込みいただけます。
※ご不明の点は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。

TEL 〇一九一（四六）二二二一
FAX 〇一九一（四六）二二二六



殖福証



ご祈祷札

▽ 地球という星が、人類へ送るメッセージのひとつが疫病なのだろうか。人類の歴史において、その命をおびやかしてきた最大の原因は、広い範囲で集団的に発生する感染症、すなわち疫病だといわれています。非日常の生活が続く中、本号は「平泉特集」ともいべきものとなりました。入間田宣夫先生からは「中尊寺の七堂伽藍ができあがるまでに」を寄稿いただきました。また、平泉では考古学上の新知見があり、調査をした八重樫忠郎さんに寄稿をいただきました。どうぞご覧ください。

▽ 東日本大震災から十年、震災の年から三陸地方の郷土芸能団体の方々をお招きしてきた「三陸郷土芸能奉演」も昨年は開催することができませんでした。新型コロナウイルス感染症が収束し、再び、虎舞に始まり、さんさ踊り、剣舞、あるいは鹿子踊りなど、郷土芸能の奉納される日を持ちたいと思います。

▽ 快く寄稿を引き受けてくださった方々、お力添えいただいたみなさまに深謝致します。

(北嶺澄照)

寺報『関山』は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。
ぜひご利用下さい (https://www.chusonji.or.jp/)。

中尊寺(寺報)『関山』第二十六号

令和三年(二〇二二)二月十一日

発行 中尊寺

(執事長 菅原光聰)

〒〇三九一四一九五

岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷(株)



コロナが収束し、日常の生活が戻ってきますように。

(写真は令和2年2月2日の大節分会)



〈発行 中尊寺〉